ISSN 1349-6743

湊川短期大学紀要

第 61 集

原著論文

乳幼児をもつ保護者の「親育ち」と「困りごと」に関する研究
—アンケート調査より—
……楠 本 洋 子

園行事「生活発表会」における子どもの学び
—保育者養成校の学生が抱くイメージに着目して—
……西 垣 あおい

幼児の睡眠習慣が交感神経活動に与える影響
……松 尾 貴 司・永 井 伸 人・辻 慎太郎
徳 島 実友香・織 田 恵 輔・臼 井 達 矢

高大連携教育における保育者養成とキャリア形成の研究
～「保育探究類型」プログラムの課題と今後の展望～
……佐 藤 奈 美・原 口 富美子・前 川 尚 子
歳 内 喜代美・井 上 古都美・安 井 良 尚
静 和 美・松 本 直 子

領域「表現」における子どもの自己実現についての一考察
—保育実践を通して—
……前 川 豊 子・安 井 良 尚

研究報告

幼児教育保育学科の学生による陶芸体験における一考察
—「丹波焼」の歴史と伝統文化にふれて—
……安 井 良 尚

子どもの歌におけるリズム表現
—付点８分音符と 16 分音符を中心に—
……高 嶋 智 美

湊 川 短 期 大 学

2025

―目　　次―

原著論文

乳幼児をもつ保護者の「親育ち」と「困りごと」に関する研究
―アンケート調査より―
…… 楠　本　洋　子……（3～10）

園行事「生活発表会」における子どもの学び
―保育者養成校の学生が抱くイメージに着目して―
…… 西　垣　あおい……（11～16）

幼児の睡眠習慣が交感神経活動に与える影響
…… 松　尾　貴　司・永　井　伸　人・辻　　慎太郎
徳　島　実友香・織　田　恵　輔・臼　井　達　矢……（17～20）

高大連携教育における保育者養成とキャリア形成の研究
～「保育探究類型」プログラムの課題と今後の展望～
…… 佐　藤　奈　美・原　口　富美子・前　川　尚　子
歳　内　喜代美・井　上　古都美・安　井　良　尚
静　　和　美・松　本　直　子……（21～28）

領域「表現」における子どもの自己実現についての一考察
―保育実践を通して―
…… 前　川　豊　子・安　井　良　尚……（29～34）

研究報告

幼児教育保育学科の学生による陶芸体験における一考察
―「丹波焼」の歴史と伝統文化にふれて―
…… 安　井　良　尚……（35～38）

子どもの歌におけるリズム表現
―付点８分音符と 16 分音符を中心に―
…… 高　嶋　智　美……（39～44）

― CONTENTS ―

Original investigations

Research on "Parenting" and "Problems" of Parents with Infants and Young Children
—From a Questionnaire Survey—
…… Yoko KUSUMOTO …… (3 ～ 10)

Children's learning in the kindergarten event "Life Presentation"
—Focusing on the image held by students of childcare training schools—
…… Aoi NISHIGAKI …… (11 ～ 16)

Effects of sleep habits on sympathetic nervous activity in pre-school age children
…… Takashi MATSUO・Nobuhito NAGAI・Shintaro TSUJI
…… Miyuka TOKUSHIMA・Keisuke ORITA・Tatsuya USUI …… (17 ～ 20)

Research on the Training of Caregivers and Career Development in Collaborative Education
～ Challenges and Future Prospects of the Childcare Inquiry Type Program ～
…… Nami SATO・Fumiko HARAGUCHI・Shoko MAEGAWA
Kiyomi SAIUCHI・Kotomi INOUE・Yoshihisa YASUI
Kazumi SHIZUKA・Naoko MATSUMOTO …… (21 ～ 28)

A consideration of children's self-realization in the area of "expression"
—from the practice of children playing with clay—
…… Toyoko MAEKAWA・Yoshihisa YASUI …… (29 ～ 34)

Materials

A Study of the Ceramic Art Experience of Students in the Department of Early Childhood Education and Childcare
—From the History and Traditional Culture of Tamba Pottery—
…… Yoshihisa YASUI …… (35 ～ 38)

Expression of Rhythm in Children's Songs
—Focus on dotted eighth notes and sixteenth notes—
…… Tomomi TAKASHIMA …… (39 ～ 44)

乳幼児をもつ保護者の「親育ち」と「困りごと」に関する研究

―アンケート調査より―

Research on "Parenting" and "Problems" of Parents with Infants and Young Children

―From a Questionnaire Survey―

楠　本　洋　子

Yoko KUSUMOTO

湊川短期大学　幼児教育保育学科

Abstract

As the government aims to improve the child-rearing function of communities and families, and parents' anxiety about child-rearing is considered to be a factor in this. In this study, we conducted a questionnaire survey to find out what problems parents with infants and young children are concerned about in their daily lives and whether they have someone to consult with, with the aim of obtaining suggestions for effective measures to prevent parents' problems from becoming long-term worries and leading to child-rearing anxiety. From the survey, we grasped the actual situation of problems and consultations, and analyzed the relationship between parenting and problems using a "parenting scale" that indicates parenting attitudes. Furthermore, we used a "child-rearing involvement scale" to analyze the influence of partners' participation in child-rearing on problems. As a result, it was estimated that the more a partner's interest in child-rearing, the greater the impacted it makes to the partner's parenting in terms of "self-strength," "purpose in life/presence," "cooperativeness," and "sense of responsibility toward children." It was made clear that a partner's interest in child-rearing contributes to improving parents' parenting attitudes. Based on these findings, it was suggested that a partner's strong interest in child-rearing is one of the effective measures to prevent parents' "problems" from becoming long-term worries and leading to "child-rearing anxiety."

Keywords: Guardian, Parenting, Problems, Partner, Consultation

要旨

国が地域や家庭の養育機能の向上を図ることを課題とし，その要因に保護者が育児不安を抱えていることが問われる中，本研究では乳幼児をもつ保護者自身が日々の生活のなかで気になっている「困りごと」はどのようなものであるか，相談相手はいるのか等についてアンケート調査を実施し，保護者の「困りごと」が長期の悩みとならず「育児不安」につながらないような効果的方策の示唆を得ることを目的とした。その調査より「困りごと」や「相談」の実態を把握するとともに，養育態度を示す「親育ち尺度」を利用して親育ちと「困りごと」の関係を分析し，さらに「育児関与尺度」を利用して，「困りごと」への配偶者 / パートナーの育児参加の影響などを分析した。その結果，配偶者 / パートナーの育児への関心が高いほど，一方の保護者の親育ちの「自己の強さ」,「生き甲斐･存在感」,「協調性」,「子どもに対する責任感」に大きく影響していると推測され，子育てに配偶者 / パートナーの育児への関心が保護者の養育態度の向上に資することが明らかになった。これらのことより，保護者の「困りごと」が長期の悩みとならず「育児不安」につながらないためには，配偶者 / パートナーの育児への関心の高いことが効果的方策の一つであると考察された。

キーワード：保護者，親育ち，困りごと，配偶者 / パートナー，相談

Ⅰ．問題と目的

こども家庭庁が 2023 年 4 月 1 日に発足した。「こどもまんなか社会」の実現を目的として，「こどもを産み育てやすい環境の整備を進めるとともに，こどもの健やかな成長を図るため，すべての子育て家庭を対象に，地域のニーズに応じた様々な子育て支援の充実に取り組んでいきます。」[1] としている。

この子育て支援施策は国により，少子化対策のなかで進められてきたものである。それは年代に応じた施策が反映され進められているが，変化する子育て家庭において，乳幼児を育てる保護者が孤立感や育児不安を抱えることがクローズアップされ，国は地域や家庭の養育機能の向上を図ることを課題としている。

このように近年の子育て支援には，子育て家庭における保護者に対する支援の喫緊の課題として，育児不安への対応とともに養育機能の向上を図ることが望まれてい

る。

特に「育児不安」は，子どもに虐待といった大きな影響を与えるとの報告もなされ，多くの研究がなされている。この「育児不安」について，大日向[2]は「子どもの成長発達の状態に悩みを持ったり自分自身の子育てについて迷いを感じたりして，結果的に子育てに適切にかかわれないほどに強い不安を抱いている状態」と定義している。また京藤[3]は「核家族化，地域との交流の希薄化，育児の孤独化などを背景に育児に対して持つ否定的な感情」としている。さらに育児不安研究の先駆者である牧野[4]は「育児行為の中で一次的あるいは瞬間的に生ずる疑問や心配ではなく，持続し，蓄積された不安の状態。子どもの現状や将来あるいは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態」と定義している。

これらのことから育児不安は，①育児に対して持つ否定的な感情，②瞬間的に生ずる疑問や心配ではなく，持続し，蓄積された不安の状態，③結果的に子育てに適切にかかわれないほどに強い不安を抱いている状態であると理解できる。

この育児不安に関連した言葉として「子育ての悩み」「困りごと」などをあげることができるであろう。

そこで，CINII で「乳幼児　子育て　悩み　困りごと」で検索をした結果，33 件あり，内 21 件が論文であった。これらの論文のタイトルと要旨によると，「親の悩み」[5]「母親の育児不安」[6]「子育てにおける困りごと分析」[7]「子育てに関する困りごとや悩み」[8]「育児不安と日常の育児相談」[9]などであった。

これらから「子育ての悩み」「困りごと」に統一した概念はないが，日々の暮らしのなかで「困りごと」が発生し，その「困りごと」が早期に解決すれば，解消につながる。しかし，しばらく継続すると「困りごと」が「悩み」につながっていくように推測され，その「悩み」が長期化すると，牧野がいうように「持続し，蓄積された不安の状態。子どもの現状や将来あるいは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態」という「育児不安」につながっていくという構図が見えてくる。さらに「育児不安」と「困りごと」の関連について，八重樫[7]は，「保護者が抱く子育てにおける困りごとを明らかにし，育児不安との関連性及びその内容を考察すること，地域子育て支援における作業療法の実践への示唆を得ること」としており，困りごとと育児不安の関連性に注目している。このことから保護者が育児不安を抱かないためには，「困りごと」に注目する必要があるだろう。そして乳幼児をもつ保護者自身が「育児不安」に陥らないためにも，「困りごと」を自覚した初期段階で気軽に相談できる環境があることが望ましいと考えられるのではないだろうか。

以上のように国が地域や家庭の養育機能の向上を図ることを課題とし，その要因に保護者が育児不安を抱えていることが問われる中，本研究では乳幼児をもつ保護者自身が日々の生活のなかで気になっている「困りごと」はどのようなものであるか，相談相手はいるのか等のアンケート調査を実施する。その調査より「困りごと」や「相談」の実態を把握するとともに，養育態度を示す楠本の「親育ち尺度」[10]を利用して親育ち因子と「困りごと」の関係を分析し，さらに楠本の「育児関与尺度」[11]を利用して，困りごとへの配偶者／パートナーの育児参加の影響などを分析することにより，保護者の「困りごと」が長期の悩みとならず「育児不安」につながらないような効果的方策の示唆を得ることを目的とする。

Ⅱ．調査方法と調査内容

１．調査方法：アンケート調査を実施

（１）調査対象施設と調査対象人数：対象施設は湊川短期大学附属幼稚園５園，保育園１園，こども園１園の計７施設であり，対象人数は対象園に乳幼児を通わせる保護者計 666 名であり，232 名の回答（34.8％）が得られた。なお分析に使用した有効回答数は 220 名（33.0％）であった。調査方法は附属園の園長会議で園長先生方にアンケート調査の説明をして理解していただき協力を依頼した。

（２）実施期間：2024 年６月 18 日から 2024 年８月２日に実施した。

（３）手続き：アンケート調査書には調査の目的・倫理的配慮を記し無記名とし，調査に同意を得られた対象者への案内は，対象園施設長に同意を得て，Google Forms を使用して実施した。なお回答者は主に子どもの育児を担っている保護者を希望した。

（４）倫理的配慮：調査に協力しないことによる不利益はないこと，途中辞退の自由，プライバシーの保持，匿名性の厳守，得られたデータの安全な処理，研究論文公開の可能性について，Google Forms の「アンケート調査のお願い」に記述して同意を得た。

２．調査内容

質問項目（１）（２）（４）は楠本[12]を参考にし，（３）は岸本ら[13]と松本[14]を参考に作成した。以下の人数と比率は有効回答数（220 名）を使用した。

（１）「属性分布」の質問項目と得られた回答数および回答率は以下のとおりである。

１）回答者：母 215 名（97.7％），父５名（2.3％）

２）年代：20 代 12 名（5.5％），30 代 149 名（67.7％），40 代 58 名（26.3％），50 代以上１名（0.5％）

３）職業：会社員 59 名（26.8％），公務員 15 名 6.8％），自営業６名（2.7％），その他 137 名（62.3％），未記入３名（1.4％）

４）就業形態：育休中 16 名（7.3％），離職中 36 名（16.4％），正規雇用 56 名（25.4％），非正規雇用 60 名（27.3％），その他 50 名（22.7％），未記入２名（0.9％）

５）お子様の数：一人 45 名（20.5％），二人 116 名（52.7％），三人 48 名（21.8％），四人以上 11 名（5.0％）

６）お子様の年齢（多児家庭があり，合計 364 名）：０歳 20 名（5.5％），１歳 19 名（5.2％），２歳 35 名（9.6％），３歳 58 名（15.9％），４歳 68 名（18.7％），５歳 68 名（18.7％），６歳以上 96 名（26.4％）

７）家族形態：核家族 205 名（93.2％），拡大家族６名（2.7％），その他家族８名（3.6％）未記入１名（0.5％）

８）近所（車で 10 ～ 15 分位）に実家がある：ある 105 名（47.8％），ない 115 名（52.2％）

９）近所（車で 10 ～ 15 分位）に友人がいる：いる 151 名（68.6％），いない 68 名（30.9％），未記入１名（0.5％）

10）現在お住いの居住年数：１年未満 16 名（7.3％），１～５年未満 88 名（40.0％），５～ 10 年未満 85 名（38.6％），10 年以上 31 名（14.1％）

（２）「配偶者／パートナーについて」は，楠本[12]の９項目の質問を採用して４択で尋ねた。評価は，「４よくあてはまる」＝４点，「３少しあてはまる」＝３点，「２あまりあてはまらない」＝２点，「１全くあてはまらない」＝１点とした。なお分析方法の統計学的処理は，IBM SPSS Statistics を用いて分析を行った。

（３）「子育てについて」の質問項目と得られた回答数（合計535件）および回答率（220名中）は以下のとおりである。

１）困っていることについて

①成長曲線に沿っていなくて心配（成長曲線とは：身長・体重の平均値やばらつきの幅を示した曲線＝母子健康手帳に掲載）19件（8.6%），②持病があり心配　13件（5.9%），③睡眠時間が少なくて心配31件（14.1%），④主食の摂取量が心配（偏食，小食，過食など）　75件（34.1%），⑤間食の摂取量が心配（菓子類など）　55件（25.0%），⑥食べ方が心配（遊び食べ，むら食べなど）　57件（25.9%），⑦個性が強くて心配（こだわりが強い，注意しても聞かない等）　63件（28.6%），⑧対人関係が心配（人見知り，集団活動に参加できない等）42件（19.1%），⑨しゃべり方が心配　24件（10.9%），⑩運動や手作業が苦手で心配　14件（6.4%），⑪家族（祖父母を含む）間で子育ての意見が合わない　７件（3.2%），⑫きょうだいの中で可愛さが異なる　９件（4.1%），⑬子どものしつけ方がわからない　29件（13.2%），⑭保護者間の人間関係の築き方がわからない　33件15.0%），⑮小学校に入学後，皆についていけるか心配　46件（20.9%），⑯その他　18件（8.2%）であった。

２）子育てにおいて，困った時の相談対処について得られた回答数および回答率は以下のとおりである。

①困ったことがある（あった）が，相談はしていない　27名（12.3%），②相談した　175名（79.5%），③困ったことはない（なかった）ので，相談はしていない　17名（7.7%），④未記入　１名（0.5%）であった。

３）「相談した」と回答された方の相談相手について尋ねた（複数回答可）。得られた回答数および回答率（220名中）は以下のとおりである。

①配偶者／パートナー　152名（69.1%），②実母132名（60.0%），③実父　27名（12.3%），④義母35名（15.9%），⑤義父　５名（2.3%），⑥きょうだい　48名（21.8%），⑦親戚　13名（5.9%），⑧友人　111名（50.5%），⑨担任　85名（38.6%），⑩園長・主任　11名（5.0%），⑪園以外の教諭・保育士　19名（8.6%），⑫保健師　30名（13.6%），⑬カウンセラー　19名（8.6%），⑭医師　17名（7.7%），⑮看護師　２名（0.9%），⑯その他　22名（10.0%）であった。

（４）「保護者の乳幼児をもつことによる子育て意識の変化」は，楠本12）の56項目の質問を採用して５択で尋ねた。評価は「５よくあてはまる」＝５点，「４少しあてはまる」＝４点，「３どちらとも言えない」＝３点，「２あまりあてはまらない」＝２点，「１全くあてはまらない」＝１点とした。なお分析方法の統計学的処理は，IBM SPSS Statistics を用いて分析を行った。

Ⅲ．結果

１．配布数と有効回答数，有効回答率

アンケート調査書の有効回答率は33.0%（有効回答数／配布数：220/666）であった。

２．「親育ち尺度」と属性別分析

得られた「親育ち尺度」[10]の下位尺度得点が，回答者の属性によってどのように影響されているかをみた。有意差がみられた属性は，「育児経験年数」と「子ども数」であった。「育児経験年数」区分を「①３年未満」17名，「②３年」33名，「③４年」35名，「④５年」39名，「⑤６年以上」96名の５区分とし，「育児経験年数」区分別の各因子における分散分析した結果を表Ⅲ-2-1に示した。さらに「子ども数」区分を「①１人」45名，「②２人」116名，「③３人以上」59名の３区分とし，「子ども数」区分別の各因子における分散分析した結果を表Ⅲ-2-2に示した。なお，分散分析において５%水準で差がみられた因子については，多重比較（Turkey 法）を行った。

（１）育児経験年数の場合の分析結果

育児経験年数のちがいが，下位尺度得点にどのような影響を与えているかをみた。「育児経験年数」区分を「①３年未満」「②３年」「③４年」「④５年」「⑤６年以上」の５区分とし，保護者の「育児経験年数」区分別の各因子における下位尺度得点を分散分析した結果は表Ⅲ-2-1に示した。

表Ⅲ-2-1　「育児経験年数」のちがいによる下位尺度得点の有意差検定結果

因子	育児経験	①3年未満 (N=17)		②3年 (N=33)		③4年 (N=35)		④5年 (N=39)		⑤6年以上 (N=96)		F		グループ間有意差検定	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	(df=4,215)		①-⑤	③-⑤
第1因子	自己の強さ	3.50	0.78	3.62	0.61	3.41	0.70	3.43	0.65	3.69	0.58	2.03			
第2因子	生き甲斐・存在感	4.32	0.63	4.47	0.52	4.31	0.49	4.40	0.51	4.51	0.58	1.22			
第3因子	協調性	3.96	0.74	4.05	0.68	3.92	0.63	4.09	0.53	4.16	0.61	1.20			
第4因子	自己制御	3.93	0.83	3.85	0.75	3.75	0.67	3.94	0.55	3.97	0.56	0.84			
第5因子	過去と未来への展望	4.40	0.64	4.33	0.70	4.34	0.61	4.44	0.59	4.39	0.62	0.18			
第6因子	子どもに関する責任	3.49	0.79	3.87	0.76	3.62	0.59	3.93	0.75	4.12	0.62	5.60	*	*	*
第7因子	柔軟さ	3.82	0.96	3.86	0.72	3.82	0.67	3.81	0.75	3.96	0.72	0.41			

*:p<.05

表Ⅲ-2-1より，第６因子「子どもに関する責任」において有意な差が認められた。「⑤６年以上」が，「①３年未満」と「③４年」より有意に得点が高かった。

（２）子ども数の場合の分析結果

保護者のもつ子ども数のちがいが，下位尺度得点にどのような影響を与えているかをみた。保護者のもつ子ども数区分を「①１人」「②２人」「③３人以上」の３区分とし，子ども数区分別の各因子における下位尺度得点を分散分析した結果は表Ⅲ-2-2 に示した。

表Ⅲ-2-2 「子ども数」のちがいによる下位尺度得点の有意差検定結果

因子＼子ども数	①1人(N=45)		②2人(N=116)		③3人以上(N=59)		F		グループ間有意差検定
	M	SD	M	SD	M	SD	(df=2,217)		①-③
第1因子　自己の強さ	3.51	0.60	3.53	0.60	3.70	0.60	1.69		
第2因子　生き甲斐・存在感	4.36	0.57	4.44	0.58	4.49	0.48	0.70		
第3因子　協調性	3.96	0.70	4.07	0.60	4.18	0.59	1.55		
第4因子　自己制御	3.82	0.78	3.91	0.60	3.99	0.56	0.96		
第5因子　過去と未来への展望	4.39	0.65	4.32	0.63	4.50	0.58	1.56		
第6因子　子どもに関する責任感	3.79	0.78	3.92	0.70	4.04	0.64	1.69		
第7因子　柔軟さ	3.67	0.78	3.88	0.74	4.06	0.66	3.71	*	*

*:p<.05

表Ⅲ-2-2 より，第７因子「柔軟さ」で有意な差が認められた。「③子ども３人以上」が「①子ども１人」より有意に得点が高かった。

３．「親育ち尺度」[10] と「育児関与尺度」[11] の分析

「育児関与尺度」の第２因子「育児への関心」が，「親育ち尺度」の下位尺度のすべてに有意に関連があることが分かっている[15]。そのため「育児への関心」の平均値を高群と低群の２区分とし，高群と低群に分けられたデータの，それぞれの親育ち尺度における下位尺度得点をｔ検定した結果は表Ⅲ-3-1 である。

表Ⅲ-3-1「育児への関心」のちがいによる下位尺度得点の有意差検定結果

因子＼育児への関心	高群(N=115)		低群(N=100)		t	
	M	SD	M	SD	(df=213)	
第1因子　自己の強さ	3.66	0.67	3.47	0.67	2.13	*
第2因子　生き甲斐・存在感	4.57	0.53	4.29	0.53	3.88	***
第3因子　協調性	4.22	0.58	3.92	0.64	3.61	***
第4因子　自己制御	3.99	0.60	3.82	0.66	1.92	
第5因子　過去と未来への展望	4.45	0.60	4.32	0.64	1.45	
第6因子　子どもに関する責任感	4.03	0.61	3.79	0.78	2.51	*
第7因子　柔軟さ	3.98	0.70	3.79	0.78	1.94	

***:p<.001　*:p<.05

表Ⅲ-3-1 より，配偶者／パートナーの「育児関与尺度」[11] の第２因子「育児への関心」の高群と低群の２区分で有意な差が認められた。それは「親育ち尺度」[10] の下位尺度の第１因子「自己の強さ」，第２因子「生き甲斐・存在感」，第３因子「協調性」，第６因子「子どもに対する責任感」で高群が低群より有意に得点が高かった。

４．「困りごと」の件数と相談の対処方法について

「親育ち尺度」と属性別分析で有意差が認められた区分別，および「親育ち尺度」[10] と「育児関与尺度」の分析で有意差が認められた因子においての「困りごと」の件数，相談の対処方法について以下に示す。

（１）育児経験年数の場合

表Ⅲ-2-1 より，第６因子「子どもに関する責任」において有意な差があることが分かり，「⑤６年以上」が，「①３年未満」と「③４年」より有意に得点が高かったことから，「困りごと」の件数と対処方法を以下の表Ⅲ -4-1 に示し，第６因子「子どもに関する責任」が「困りごと」へおよぼす影響をみた。

表Ⅲ-4-1 「育児経験年数」の５区分別における相談の対処件数と比率

相談の対処	①3年未満 (N=17)		②3年 (N=33)		③4年 (N=35)		④5年 (N=39)		⑤6年以上 (N=96)	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
①困ったことはある（あった）が相談していない	3	17.6	8	24.2	4	11.4	4	10.2	8	8.3
②相談した	11	64.8	21	63.7	29	82.9	34	87.2	80	83.4
③困ったことはない（なかった）ので相談していな	3	17.6	4	12.1	2	5.7	1	2.6	7	7.3
④未記入	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.0

表Ⅲ-4-1 より，相談の対処について，「②相談した」に注目してみると，「④５年」が 87.2％で一番多く相談しており，「②３年」が 63.7％と一番少ないことが分かった。また育児経験年数で，親育て尺度の下位尺度に有意差があった「⑤６年以上」と「③４年」が，それぞれ 83.4％と 82.9％であるところから，相談対処には，あまり変わらないことが分かった。

（２）子ども数の場合

表Ⅲ-2-2 より，第７因子「柔軟さ」で有意な差があった。「③子ども３人以上」が「①子ども１人」より有意に得点が高かったことから，「困りごと」の件数と対処方法を以下の表Ⅲ-4-2 に示し，第７因子「柔軟さ」が「困りごと」へおよぼす影響をみた。

表Ⅲ-4-2 「子ども数」の３区分別における相談の対処件数と比率

相談の対処	①1人 (N=45)		②2人 (N=116)		③3人以上 (N=59)	
	N	%	N	%	N	%
①困ったことはある（あった）が相談していない	6	13.3	13	11.2	7	11.9
②相談した	34	75.6	96	82.8	46	78.0
③困ったことはない（なかった）ので相談していな	5	11.1	7	6.0	5	8.4
④未記入	0	0.0	0	0.0	1	1.7

表Ⅲ-4-2より，相談の対処について，「②相談した」に注目してみると，「③３人以上」が78.0％であるところ，「①１人」は75.6％と少ないことが分かったと同時に「①困ったことはある（あった）が相談していない」において，「①１人」が「③３人以上」より多いことが分かった。

（３）「育児への関心」で有意差が認められた区分別「困りごと」の相談相手

配偶者／パートナーの「育児関与尺度」[11] の第２因子「育児への関心」の高群と低群において「親育ち尺度」[10] の下位尺度「自己の強さ」「生き甲斐･存在感」「協調性」「子どもに対する責任感」の下位尺度得点において有意差がみられたため，困りごとの件数と対処方法を以下の表Ⅲ-4-3に示し，配偶者／パートナーの「育児への関心」が困りごとへおよぼす影響をみた。分析人数については，高群（115名），低群（100名），未記入（５名）であった。

表Ⅲ-4-3 「育児への関心」の２区分別における相談の対処件数と比率

相談の対処	①高群(N=115)		②低群(N=100)	
	N	%	N	%
①困ったことはある（あった）が相談していない	10	8.7	16	16.0
②相談した	98	85.2	74	74.0
＊相談者に配偶者/パートナーあり（内数）	92	93.9	57	77.0
＊相談者に配偶者/パートナーなし（内数）	6	6.1	17	23.0
③困ったことはない（なかった）ので相談していない	7	6.1	9	9.0
④未記入	0	0.0	1	1.0

表Ⅲ-4-3より，相談の対処について，「②相談した」に注目してみると，「高群（85.2％）」が，「低群（74.0％）」より多いことが分かった。また，相談者に配偶者／パートナーありにおいて「高群（93.9％）」が，「低群（77.0％）」より多いことが分かった。

Ⅳ．考察

１．属性分布について

調査書に「主にお子様の育児を担っておられる方に回答を希望」と記載してアンケートを実施したところ，回答者は母親が97.7％で父親が2.3％であったことより，男女共同参画時代において男性に育児参加を促しているが，主に育児を担っているのは，母親が多いことが明らかになった。さらに回答者は30歳から40歳代が94％であり，20歳代の保護者が少なく育児をする年代が高くなっている傾向にあると考察される。また子ども数については，二人が半数であることも明らかになっており，さらに現代は核家族化の時代と言われているが，本調査でも核家族が93.2％であり，時代の背景であることも明らかになった。

２．子育て（困りごと）について

困りごとの総回答数は535件あった。質問項目は，「子どもの成長・健康①②③」の３項目，「子どもの食事④⑤⑥」の３項目，「子どもの個性⑦⑧⑨⑩」の４項目，「親の考え方，思い⑪⑫⑬⑭⑮」の５項目と「その他⑯」であった。その中で多かった上位３位は「子どもの食事」「子どもの個性」であり，１位④主食の摂取量が心配（34.1％），２位⑦個性が強くて心配（28.6％），３位⑥食べ方が心配（25.9％），４位⑤間食の摂取量が心配（25.0％），５位は「親の考え方，思い」の⑮小学校に入学後，皆についていけるか心配（20.9％）であった。このことから，１位から４位は乳児から年少児を持つ保護者に多い困りごとのように推測され，これらの困りごとが子どもの年齢が高くなるとともに徐々に解消され，年長児になると就学への「親の考え方，思い」の困りごとに変化してくように考察された。このことから乳児から年少児の保護者には，「子どもへの健康・成長面，特に食事関係の講習や実習」の開催等が，さらに年長児の保護者には，「就学前の保護者向けの講習や先輩ママのお話会」の開催等も有効な子育て支援ではないかと考察された。

３．子育ての相談の対処と相談相手について

子育ての相談の対処についての全体の回答数が一番多かったのは，「②相談した（79.5％）」で８割近くの保護者が相談していることが分かった。しかし「①困ったことがある（あった）が，相談はしていない（12.3％）」ということが分かり，特に子ども数の区分「①１人（11.1％）」が１割あることから，対処方法についての詳細な調査の必要性が示唆された。

また相談相手についての総回答数は728件であった。その中で多かった上位３位は「①配偶者／パートナー（69.1％）」，「②実母（60.0％）」，「⑧友人（50.5％）」であり，続いて「⑨担任38.6％）」「⑥きょうだい（21.8％）」「④義母（15.9％）」と続いている。このことから，７割近くが相談相手のトップに配偶者／パートナーを選んでおり，次いで信頼関係が築かれていると判断できる実母，友人が選ばれている。さらに園の担任，きょうだい，義母と続き，子育てについての相談相手に実母や義母が選ばれているのは，それぞれの保護者の親である子育て経験者への信頼が推測されるが，相談内容によって，専門

性を求める困りごとには担任が選ばれているように示唆された。

４.「親育ち尺度」と属性別分析について

「親育ち尺度」[10] の下位尺度得点が，母親の属性によってどのように影響されているかをみた結果，有意差がみられた属性は，「育児経験年数」と「子ども数」であることが分かった。「育児経験年数」のちがいによる分析の結果，「親育ち尺度」第６因子「子どもに関する責任」において有意な差が認められ，「⑤６年以上」が，「①３年未満」と「③４年」より有意に得点が高かったことが分かった。このことから，育児経験６年以上の保護者が，育児経験３年未満の保護者と育児経験４年の保護者より，育児経験が長くなると「子どもに関する責任」が増してくることが推測された。「子ども数」のちがいによる分析の結果，「親育ち尺度」の第７因子「柔軟さ」において有意な差が認められ，「③子ども３人以上」が「①子ども１人」より有意に得点が高かったことが分かった。このことから，３人以上の子どもをもつ保護者は，子ども１人の保護者より，子ども一人ひとりの友達関係やその友達の保護者との関係性も増え，対人関係が複雑化する中で，人としての「柔軟さ」が増し，３人以上の子どもに関する責任も高くなっていくように推測された。

５.「親育ち尺度」[10] と「育児関与尺度」[11] の分析について

配偶者／パートナーの「育児関与尺度」の第２因子「育児への関心」の高群と低群の２区分で有意な差が認められ，「親育ち尺度」[10] の下位尺度の第１因子「自己の強さ」，第２因子「生き甲斐・存在感」，第３因子「協調性」，第６因子「子どもに関する責任感」で高群が低群より有意に得点が高かった。このことから，配偶者／パートナーの育児への関心が高いほど，その配偶者／パートナーの親育ちの「自己の強さ」，「生き甲斐･存在感」，「協調性」，「子どもに関する責任感」に大きく貢献していると考察され，子育てに配偶者／パートナーの育児への関心が保護者の養育態度の向上に資することが明らかになった。

６.「困りごと」の件数と相談の対処方法について

育児経験年数の場合，「子どもに関する責任」が困りごとへおよぼす影響をみると，相談対処の「②相談した」において「⑤６年以上」が，「①３年未満」より多く，「③４年」とあまり変わりないことが分かった。このことから，相談の対処には，「子どもに関する責任」の子育て意識とは直接には関連していないように示唆された。子ども数の場合，「柔軟さ」が困りごとへおよぼす影響をみると，相談の対処について区分「①１人」は「①困ったことはある（あった）が相談していない」において，区分「③３人以上」より多いことが分かった。この区分「①１人」は，相談する人が傍に少ないのか，相談する場所や相談方法が分からないのではないかと推測された。育児への関心の場合，配偶者／パートナーの「育児関与尺度」[11] の第２因子「育児への関心」が困りごとへおよぼす影響をみたところ，「親育ち尺度」[10] の「自己の強さ」「生き甲斐・存在感」「協調性」「子どもに対する責任感」の親育ち尺度の下位尺度得点において，高群が低群より高くなっていることが分かった。それに加え，相談の対処についての高群が，低群より「相談した」が多いこと，さらに「相談者に配偶者／パートナーあり」において，高群（93.9％），低群（77.0％）であることから，高群の保護者が配偶者／パートナーに相談していることが，高群の保護者の親育ちの「自己の強さ」，「生き甲斐・存在感」，「協調性」，「子どもに対する責任感」に大きく貢献していると考察され，子育てに配偶者／パートナーの育児への関心の高さが保護者の養育態度の向上に影響していることが明らかになった。

以上のようにアンケート調査の分析より，主に育児を担っている保護者は母親が約 98％，家族形態「核家族」約 93％，子ども数「二人」が約 53％，「困りごと」の件数は平均 2.4 件，「困りごとを相談した」との回答者は約 80％，その相談相手に一番多かったのは配偶者／パートナー約 70％であった。そこで保護者の「親育ち」に配偶者／パートナーの貢献度を分析するために，育児関与尺度の「育児への関心」の平均値を高群と低群に分けて，「親育ち尺度」と分析した結果，「親育ち尺度」の４因子において高群が低群より有意に高かったことから，「育児への関心」の高い得点の保護者の方が，低群の保護者より「親育ち」が高いことがわかり，配偶者／パートナーの育児への関心が保護者の「親育ち」に貢献していると考察された。

これらのことから，乳幼児をもつ保護者の「親育ち」に配偶者／パートナーの育児への関心の高さが影響しており，さらに保護者の養育態度の向上に貢献していることが推測されることから，配偶者／パートナーの育児への関心の高さが保護者の「困りごと」が長期の悩みとならず「育児不安」につながらないような効果的方策の一つであると示唆された。

Ⅴ．今後の課題

本研究では，子育てに困りごとを抱えながら，日常生活を過ごしている乳幼児をもつ保護者の現状を把握することができた。その中で気になることとして，子ども数１人の保護者に「困ったことがある（あった）が，相談はしていない」が，１割あることが分かった。まずはその保護者たちの配偶者／パートナーの育児への関心の得点が高くなることに期待をしたいが，自助で解決につながらなければ，その困りごとが長期の悩みとなり「育児不安」につながらないための対策が必要になるであろう。今求められている保護者の養育機能の向上も視野に入れながら，乳幼児をもつ保護者が，居住する地域での保育機関の教職員と信頼関係を築きながら，困りごとを自覚した初期段階に気軽に相談できる，仲間作りができる，見守ってくれる人たちが集える場所が身近に早期に増設されることを期待したい。またこども家庭庁が「保護者との定期的な面談を通じて，育児の不安や孤立，貧困などを抱える家庭を把握し，その際，保育所が市町村や関係機関と連携し，支援計画を作るなどの支援体制を提案していく」[16] として，「未就園児の預かりモデル事業」を全国で展開するとしている。この事業の効果も期待したい。

【謝辞】

本研究を作成するにあたり，湊川短期大学附属北摂中央幼稚園長の原口富美子先生はじめ，同附属園長先生方にはアンケート調査を園児の保護者の皆さまに案内をしていただきました。また園児の保護者の皆さまにはアンケート調査にご協力いただき，貴重なご意見を頂戴いた

しました。ここに記して感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

１）子ども家庭庁 https://www.cfa.go.jp/top（検索取得：2024.10.10）
２）大日向雅美（2002）「育児不安とは何か―発達心理学の立場から」『こころの科学』103 p.10
３）京藤広果（2023）「育児観・子育て観と育児不安・子育て不安の研究動向と要因についての検討」『甲南女子大学大学院論集』21 p.13
４）牧野カツ子（1982）「乳幼児を持つ母親の生活と〈育児不安〉」『家庭教育研究所紀要』３ pp34-56
５）今井靖親，中村年江（1990）「幼児期における子育てに関する親の悩み」『奈良教育大学教育研究所紀要』26 pp.25-33
６）伊吹麻里，中野真希，河野益美，足利学，中村歩美，室谷絵理子，柴田真理子，中野博重（2004）「核家族における乳幼児の母親の育児不安」『藍野学院紀要』18 pp.105-111
７）八重樫貴之「（2015）保護者が抱く子育てにおける困りごとの分析」『首都大学東京大学院修士論文』pp.1-12
８）唐田順子，森田明美（2007）「乳幼児をもつ母親の子育てに関する困りごとや悩みに関する研究」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』７ pp.249-263
９）山﨑さやか，篠原亮，秋山有佳，市川香織，尾島俊之，玉腰浩司，松浦賢長，山崎嘉久，山縣然太朗（2018）「乳幼児をもつ母親の育児不安と日常の育児相談との関連―健やか親子 21 最終評価の全国調査より―」『第65巻　日本公衛誌　第７号』pp.334-346
10）楠本洋子（2018）博士論文「保護者支援としての親育て・親育ち支援に関する研究」『大阪総合保育大学大学院』p.109
11）楠本洋子（2018）前掲論文 10）p.132
12）楠本洋子（2018）前掲論文 10）資料５質問紙調査書Ⅱ
13）岸本美紀，武藤久枝（2013）「保護者が望む保護者支援のあり方―幼稚園と保育所との比較―」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』47 資料 pp.23-24
14）松本峰雄，大江敏江，小林久美（2022）『子どもの食と栄養』ミネルヴァ書房　p.29
15）楠本洋子（2018）前掲論文 10）p.140「パス構造図」
16）こども家庭庁 https://spaceshipearth.jp/kodomokateityou/（検索取得：2025.1.1）

園行事「生活発表会」における子どもの学び

―保育者養成校の学生が抱くイメージに着目して―

Children's learning in the kindergarten event "Life Presentation"

―Focusing on the image held by students of childcare training schools―

西　垣　あおい

Aoi NISHIGAKI

湊川短期大学　幼児教育保育学科

要旨

本研究は，保育者養成校で保育者を目指す学生に視点をおいて，学生は生活発表会をどのように捉えているのかに着目し，生活発表会に向けての活動が子どもの学びとどのようなかかわりがあるのかを検討することを目的とした。生活発表会の体験について学生への質問調査を行い分析したところ「ポジティブ要因」が 12,「中立要因」が５,「ネガティブ要因」が３のカテゴリーが抽出された。生活発表会をすべての子どもが最初から楽しいと思える活動を計画するのは難しいが，最初は否定的に捉えていても，友達と一緒に活動することで楽しい活動として肯定的に変化していく。これには保育者の働きかけや環境つくりが大きく影響している。生活発表会の活動は，どのような内容で行うかも大切ではあるが，どのように取り組むかが重要であることが示唆された。さらに，生活発表会の活動と「10 の姿」の項目すべてにおいて多様な面で子どもたちの学びや育ちと深く関連していることが明らかになった。

キーワード：園行事，生活発表会，保育環境，保育者養成校

1．研究の動機と背景

幼稚園，保育所，認定こども園で行われている行事は，保育の中で年間を通して計画に組み込まれ様々な内容や形式で実施されている。1956（昭和 31）年に幼稚園教育要領が発刊された当初より行事についての記述があり，第２章-8(3）に「幼稚園や家庭や近隣で行われる行事に興味や関心を持つ。」と記されている。さらに，「遠足・運動会・発表会・ひな祭りなど，幼稚園の行事に喜んで参加する。近くの小学校で催される運動会などの行事を見に行ったり参加したりする。幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。みんなと一緒に国の祝日などを楽しむ。」と園行事の具体的な名前も挙げ示されている。しかし，ここでは行事について子どもに興味・関心を持たせることは述べられているが，行事を実施するにあたっての具体的な方法や指導については記されていない。1964（昭和 39）年の改訂で初めて，幼稚園教育の基本原則としての行事に対して指導上の留意点が「幼稚園における行事の指導にあたっては，幼児の生活に変化やうるおいを与え，その充実に役立たせるように指導すること。なお，地域的な行事や全国的な行事などについては，その教育的価値を十分検討し適切なものを精選すること。」と示された。行事を実施するにあたり教育的価値を十分に検討することと示されたことが特徴といえる。さらに，1989（平成元）年の改訂では，行事の指導上の留意点に「適切なものを精選し幼児の負担にならないようにすること。」が加えられ，子ども主体で行事を実施するのが望ましいことが強調されるようになった。幼稚園教育要領においての行事の指導にあたっては，1989（平成元）年の改訂から，2018（平成 30）年の改訂に至るまで，指導上の留意点の記載は同じ表記がされている。しかし，幼児が主体的に活動できるようにすることが記載されているに止まり，行事の回数や種類に定めはなく，多くの園で園行事が行われているものの，その行事の意義，方法，種類，時期は各園の方針のもとで構成されていることが予想される。

では，行事はどのようなねらいで行われているのであろうか。高橋（2003）は行事の意義と役割について「子どもの生活を豊かにする，環境とのふれあいを広げる，機会教育になる，集団の形成に意義がある」と述べている。つまり，行事は子どもの生活の中に彩りを与え，様々な環境に触れながら子どもの成長に影響を及ぼすものであると考えられる。また，青戸ら（2019）は，保育者を対象に行事活動の意義について調査し，行事活動に対して求めている意義について，「達成感」と答えた保育者は７割を超え，「協調性」「人間関係力」が半数を超えていた。この結果から，保育者は行事活動では子どもの個人の能力の向上よりも，誰かと何かをする経験から得るものが大きいと捉えていることが分かる。

行事は年間計画，指導計画や保育計画に基づいて行われている。足立（2014）の調査によると，保育者を志す学生が子どもの成長に大切だと感じている行事は「運動会」「生活発表会」であった。保育のまとめとしての「運動会」や「生活発表会」は，子どもの成長に欠かせないものとして位置づけられるであろう。また，生活発表会について相浦ら（1989）の調査によると，「９割以上の園で生活発表会が行われており，６割以上の園において生活発表会が最も重要な行事である。」と保育者が捉えていることを示している。一方で，若尾（2017）は，「生

活発表会は幼稚園，保育所，認定こども園において，１年間の集大成として年度末に実施されることが多く，生活発表会のような保護者に見せる行事は，保育者中心になりがちである。」と指摘し生活発表会を形成するうえでの課題をあげている。さらに，角尾（1964）は，1960年代に行われていた「お遊戯会」に対して「親たちに見せるためということから，表面的なキレイゴトを追いすぎて，時に，子どもをギセイにしていたことはないだろうか。」と疑問を投げかけている。角尾（1964）と若尾（2017）が述べたことを比較してみても，1964年から2017年の約50年が経過しても，様々な背景があることが予想されるが同じ内容の問題をあげている。このことからも，園行事の中でも保護者に見てもらう生活発表会などの行事は，当日までの子どもたちの様々な取り組みの過程が重要となるが，出来栄えを重視しがちで保育者主導となっていることが伺える。以上のことから，子どもが生き生きとした表情で楽しんで参加できる「生活発表会」とはどのような活動なのか，また，「生活発表会」が子どもの学びとどのようなかかわりがあるのかの検討を行いたい。

2. 研究の目的と意義

本研究の目的は，保育者養成校で保育者を目指す学生に視点をおいて，学生は生活発表会をどのように捉えているのかに着目し，生活発表会に向けての活動が子どもの学びとどのようなかかわりがあるのかを検討することである。生活発表会についての研究は，当日までの形成プロセスや指導の実践方法の検討，また，生活発表会の劇遊びを保育内容の５領域の視点から研究されているものが多くみられる。それらの研究の多くは，保育者の意識に着目されており保育者を目指す学生に視点をおいての研究は数少ない。そこで，本研究は保育者を目指す学生の体験から，園行事「生活発表会」に対してどのようなイメージを持っているのかの調査を分析する。その結果から，子どもが主体的に楽しく活動できる生活発表会とはどのような行事なのかを省察する。さらに，保育者養成においての授業構成のきっかけとなり，さらに，学生の園行事「生活発表会」に対する知識獲得につながることが期待できる。

3. 生活発表会の位置づけ

生活発表会の成り立ちについて，高橋ら（2003）によると,「1962（大正15）年「幼稚園令」に示された,遊戯,唱歌，観察，談話，手技等の「保育５項目」のなごりから「お遊戯会」と呼ばれるようになった。」とまとめている。さらに高橋ら（2003）は,「今では子ども主体に置いた日常生活の発表の場として「生活発表会」と名称が与えられるようになった。」と述べ,「お遊戯会」から「生活発表会」に変化していったことがわかる。田中ら（2004）は，雑誌『幼児の教育』から,「お遊戯会」を当時の保育者たちはどのように考え，どのように変化して現在の生活発表会に形成されたのかを探っている。その中で，雑誌『幼児の教育』は明治42年より発行されているが「お遊戯会」についての記載は少なく，多くの記載があったのは大正10年以降から昭和５年までであることを示し，この間に「お遊戯会」という名称が確立されたとしている。また，柴田（2018）は,「生活発表会」を「幼児教育の現場では「生活発表会」，または，それに準じた発表会が年間行事に組み込まれており，日常生活での「あそび」の成果や子ども達の成長した姿を保護者に発表する場」と位置付けている。

では,「生活発表会」はどのような形式で行われているのだろうか。高橋ら（2003）によると「生活発表会」は,「劇遊び，リズム表現，合奏，合唱，踊り，運動あそびなどを通し，発想力，表現力や協調性，創造性を豊かにしていくことが考えられる。」と示している。「生活発表会」は様々な方法があり，各園の教育方針によって方法も異なることが予想される。また,「生活発表会」のねらいについて,兵頭（2019）によると「友達と一緒に歌ったり，演じたり，イメージを豊かに表現することを楽しむ。家族や友達にみてもらうことを喜ぶ。」と示している。このように「生活発表会」は，様々なねらいや方法で行われていることが予想されるが，1960年代頃から見ても「お遊戯会」「生活発表会」については劇あそびに関する著書や雑誌の掲載を多く目にする。「生活発表会」において，劇あそびを取り入れて実施している園が多いと捉えても良いだろう。

昭和30年代より幼稚園教諭であった樋口（1961）は，当時の「お遊戯会」について保育記録として『幼児教育』という雑誌に記事を掲載しており，内容をまとめると次のとおりである。当時の「お遊戯会」は，園内ではなく市の中心部にある公会堂を借りて盛大に開催され，発表内容もきれいな衣装を着て日本舞踊を披露していた。また，本番までの保育においては，個人での指導が必要なため，日常の保育をしながら個人指導を行い，日常の園生活とかけ離れているものとなっていた。樋口（1961）は，当時の「お遊戯会」について，保育者にとっても子どもにとっても非常に負担が大きかったと私見を述べている。さらに，望ましいお遊戯会のあり方や重要性について，子ども本位に計画し内容が能力にあっていること，子ども達が園でどのような生活をしているのかありのままを保護者に見ていただく機会だと示している。また，生越（1983）は，劇あそびの考え方や指導法があるがと前置きしたうえで,「劇あそびについて論じているほとんどの人が否定していることがある。それは，保育者が子どもたちに無理やり演技を教え込んで劇をやらせることだ。しかし，年に１度の発表会で父母に見せるために上演されることが多いので，できるだけ見栄えをよくしようと舞台装置や衣装に力を入れ，子どもたちに演技を整然とやらせるために先生方は苦労する。」と劇遊びの指導に対しての課題とともに保育者の葛藤をあげている。さらに，大豆生田（2021）は，生活発表会の見直しを行った園ついて「どの学年も大道具は保育者の手が入り，大人の作った衣裳を全員に着せていました。例えば３歳児は,保育者の誘導でステージ中央に出てきて,ポーズを決めて拍手をもらうという，保護者の目を意識した大人受けする演出を考えがちだった。」と見直しに至るまでの事例を紹介している。このように，生活発表会での劇遊びをどのように展開し指導するのかの保育者の苦悩が読みとれる。園行事の「生活発表会」をどのように捉え，子どもが主体的に活動できるような指導や環境構成が必要なのかを検討する必要があると考える。

4. 研究方法

調査対象：M短期大学幼児教育保育学科
２年生「幼児教育・保育課程論」の受講者48名
１年生「保育内容総論」の受講者50名

以上の98名を対象とし欠席者９名を含み有効回答数

は86件を得た。なお，調査実施日までに「生活発表会」を学習するような内容の授業は行っていないが，子どもの育ちに関する「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の内容については学習している。

調査期間：2024年11月

調査内容：「幼児教育・保育課程論」「保育内容総論」の授業内で質問調査を行った。調査は以下の７項目とする。

①皆さんが幼稚園・保育所に通っていた頃，生活発表会を経験しましたか。

②生活発表会はどのような形式で行われていましたか。

③②の質問に対してその他の回答は，どのような内容だったのか教えてください。

④生活発表会に対してどのような印象を持っていますか。（自由記述）

⑤生活発表会の印象の理由を教えてください。（自由記述）

⑥生活発表会の活動はどの「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」（以下「10の姿」と記載する）と関連があると思いますか。（複数回答）

⑦生活発表会のどのような活動が「10の姿」と関連があると思いますか。（自由記述）

項目①②⑥は項目を選ぶ，項目③④⑤⑦は自由記述での回答とした。

倫理的配慮：質問調査に関して，個人の不利益にならないこと，授業評価の対象にならないこと，質問調査の回答は本研究のみで使用することを説明し了承を得た。本調査への回答は自由意志とし回答をもって同意が得られたものとする。

分析方法：項目①②③は単純集計し，項目④⑤⑥⑦は，足立（2014）による自由記述の分類方法，データから類似していると思われる概念を抜き出し，同じコードに集約しカテゴリーを抽出して名付けることとした。さらに，設問④⑤においては，カテゴリーを抽出したものを，足立（2014）による，「ポジティブ要因，中立的要因，ネガティブ要因」の３つに大別して分析を行う。

5. 調査の結果と考察

5-1. 生活発表会の経験について

項目①「学生が幼稚園や保育所等に通っていた頃，生活発表会を経験したか」は，表１のとおり82名（95.3%）の学生が経験していると回答し，経験していないのは１名（1.2%）のみだった。覚えていないが３名（3.5%）いたものの，多数の保育施設で生活発表会が行われており，子どもの成長を発表する機会の重要な行事として実施されていることが考えられる。

表１　生活発表会を経験したか

	n＝86（%）
経験した	82（95.3）
経験していない	1（1.2）
覚えていない	3（3.5）

項目②「生活発表会はどのような内容で行われていたか」は，表２のとおり劇あそびが47名（54.6%）と約半数を占め，楽器あそびが11名（12.8%），歌が４名（4.7%），次いでダンスが２名（2.3%），得意なことについての回答者はいないという結果となった。22名（25.6%）がその他と回答しており，その他がどのような内容なのか項目③で回答を求めた。

表２　生活発表会はどのような内容で行われていたか

	n ＝ 86（%）
劇あそび	47（54.6）
楽器遊び（合奏）	11（12.8）
歌	4（4.7）
ダンス・踊り（リズム表現）	2（2.3）
得意なこと	0（0）
その他	22（25.6）
劇・楽器	4
劇・歌	3
劇・歌・楽器	3
劇・歌・ダンス	2
劇・歌・ダンス・楽器	2
劇・楽器・ダンス	1
劇・歌・ダンス・展示	1
歌・合奏	1
複数	3
覚えていない	2

項目③「項目②でその他との回答はどのような内容だったのか」は，表２で示すその他にもあるように楽器あそび，歌，ダンスと劇あそびを組み合わせて経験したとの回答が多くみられた。その組み合わせには，劇あそびを中心とした組み合わせになっていることがわかる。中には，劇あそび，歌，楽器，ダンスの他に作品を展示するといった回答もあり，多くの内容を組み合わせて生活発表の場として行事を行っている園もあることが予想できる。その他の回答の劇あそびも含めると，学生の７割が生活発表会で劇あそびを経験していることが確認でき，生活発表会において，多くの園が保護者に劇あそびという形で子どもの成長を披露していることが伺える。

5-2. 生活発表会の印象について

項目④「生活発表会に対してどのような印象を持っているか」と項目⑤「生活発表会に対して印象の理由」について，回答をカテゴリーに分類し表３と表４にまとめた。分析は，足立（2014）による研究においての方法で，「肯定的に捉えているものを「ポジティブ要因」，否定的に捉えているものを「ネガティブ要因」，否定的であったがその後肯定的に変化しているものを「中立要因」の３つに大別する」こととし，回答をカテゴリーに分類したところ，自由記述されているものから「ポジティブ要因」が12，「中立的要因」が５，「ネガティブ要因」が３のカテゴリーを抽出した。抽出された印象要因について，「ポジティブ要因」「中立的要因」「ネガティブ要因」の順に結果と考察を述べていく。（以下，抽出されたカテゴリーを【　】で示す。）

まずは，「ポジティブ要因」について述べる。生活発表会は，70の回答64.8%の学生が良い印象だったことが確認できた。生活発表会の印象について，家族が観に来てくれる，頑張る姿を見てもらえるなどの【家族が観てくれる】嬉しさの回答が最も多かった。次いで，劇あそびの道具や衣装を作ったり表現したりして遊ぶ，楽器の練習をするなど，当日までの活動の【楽しさ】との回答が多かった。また，友達と一緒に一つの事をやり遂げることの【達成感】や，自分たちで話し合って決めたり，何度も練習したりすることのへ【充実感】も感じている

表３　生活発表会への印象の分類

要因	カテゴリー	印象	印象の理由
ポジティブ要因	家族との関係	家族が見てくれる，家族とのかかわり，父母，祖父母，兄弟の参観	見に来ることの嬉しさ，当日保護者を見つける，頑張る姿を見てもえる，祖父母が来てくれる，練習の成果をみてもらう気持ち，成長した姿をを観てもらう，頑張りを褒めてもらう，親子で参加できる行事が嬉しかった
	喜び	楽しかった，友達と一緒，当日までの過程	道具つくりが楽しい，衣裳がきれて嬉しい，歌や楽器あそびが好き，保護者に見てもらう期待，毎日の練習
	達成感	役になるのが楽しかった，やり遂げた嬉しさ	一つの事をやり遂げる，成功した時の嬉しさ，当日までの友達と完成させる過程，当日の頑張り
	充実感	自分たちのやりたいこと，話し合い，練習	毎日たくさん練習した，小道具・大道具を自分たちで作った，みんなと一緒，自分のやりたいことを話し合う
	友達との協力	クラスで一つになれる喜び，友達との気持ちの共有，目標に向かう姿，クラスの団結	友達との話し合い，先生や保護者への秘密の共有，友達に助けてもらったこと，友達と一緒だから乗り越えられた，子どもだけの練習，友達と一緒の楽しさ
	輝ける場	１番楽しい行事，主役になれる，真剣に取り組む姿	目立ちたい気持ち，最も大きな思い出，得意なことを披露できる，クラスの友達と一つになれる
	成長	１年の集大成，今の自分，自信がつく	年少組の頃の自分と年長の自分，友達と一緒にやり遂げる，できるようになった自分
	気持ちの共有	友達を認める，異年齢とのかかわり	学年ごとに見せ合う楽しさ，年長への憧れ，友達同士教え合う，友達の良い点を発見する
	表現の楽しさ	身体表現への芽生え，劇あそび・楽器あそびの楽しさ	みんなで合奏した時の感動，役になりきる，好きなように身体表現する，自分たちで動きを考える
	保育者との関係	保育者の環境つくり，子どもへの働きかけ	先生に頑張っていることを褒めらる，先生と一緒に歌うのが楽しい，先生の励まし
	期待	保護者が来てくれる，プログラム作り	保護者への当日の招待状つくり，内容を秘密にする
	非日常	特別な日	普段の生活の中ではしないこと，たくさんの客の前で劇をした，祖父母が初めて園に来てくれた
中立要因	葛藤	楽しさと恥ずかしさ，人前での発表に対する緊張，友達との関係，悔しさ	年中の時の嫌な思い出，やりたい役ができなかった，苦手なことを大好きな家族のために頑張る，先生の励まし，好きな衣裳がきれなかった，当日欠席の友達の代役への不安
	保育の成果	子どもの成長，劇・合奏・歌での発表，成長を見る機会	子どもと保育者の一体感，笑顔の雰囲気，園での経験，園生活での子どもの姿，練習風景の参観
	友達との関係	友達とのケンカ	意見の食い違いでのケンカ，役決めの話し合い，友達との気持ちの折り合い
	緊張	感情のコントロール，緊張の緩和	年齢が上がるにつれての自信，友達同士で励ます，恥ずかしかった経験からの自信
	自立心	自分を表現，交流を広げる	保護者の知らない自分，苦手なことに挑戦してできるようになる経験
ネガティブ要因	負担	自由遊びの時間減少，練習の大変さ	練習時間が長い，セリフが長かった，先生の言っていることが難しい，鍵盤ハーモニカや劇のセリフの家での練習
	苦手	人前での発表	人前に出るのが恥ずかしい，セリフを覚えられない，楽器の演奏がよくわからない
	不安	怖い，怒られる，できない	欠席が多く練習できなかった，うまくできなかったことを想像する，大勢のお客

ことが分かる。生活発表会は，１年の保育の集大成として【自分が輝ける場】で，自分の成長を家族に見てもらえる最も印象に残っている行事として捉え，友達と協力して道具を作ったり，セリフを練習したり，友達と一緒だからこそ乗り越えられたと感じていることが伺える。本番を迎えるまでに【友達と協力】したり，異年齢や同じ学年のクラスで見せ合ったりすることで，【友達との気持ち】と共有し友達の良いところを発見することができたことが予想される。また，生活発表会を【非日常】の行事や特別な日として捉え，家族を招待するためにプログラムなどを作成し【期待】に胸を膨らませながら本番を楽しみにしている気持ちもあったのであろう。また，生活発表会までの過程において，保育者の励ましの言葉や子どもを認める言葉が嬉しかったとの回答もあり，【保育者との関係】において，人的環境としての保育者の働きかけが欠かせないのではないだろうか。

次に，「中立的要因」について述べる。23の回答21.3％の学生が友達とのケンカや葛藤を乗り越えて活動した印象だったことが確認できる。この回答から，苦手なことを家族が観てくれる期待から頑張る気持ちに変えたことや，人前での発表の不安にも立ち向かう【葛藤】が伺える。また，友達との意見の違いからのケンカや，やりたい役ができなかったことへの悔しさなど，【友達との関係】が印象にあるとの回答もあった。年齢が上がるにつれて経験を重ね友達との励まし合いから【緊張】の緩和ができたことや，感情のコントロールをして取り組んでいることが読み取れる。さらに，少数の回答ではあるが，保護者が知らない自分を見てもらう，できないことができるようになるなどの回答もあり，【自立心】も中立要因として捉えられる。生活発表会での経験を他

表４　生活発表会の印象数と要因数

要因	カテゴリー	回答数（%）n＝108	要因数（%）
ポジティブ要因	家族との関係	13（12.0）	70（64.8）
	喜び	10（9.4）	
	達成感	8（7.4）	
	充実感	6（5.5）	
	友達との協力	6（5.5）	
	輝ける場	5（4.6）	
	成長	5（4.6）	
	気持ちの共有	4（3.7）	
	表現の楽しさ	4（3.7）	
	保育者との関係	3（2.8）	
	期待	3（2.8）	
	非日常	3（2.8）	
中立要因	葛藤	8（7.4）	23（21.3）
	保育の成果	5（4.6）	
	友達との関係	4（3.7）	
	緊張	3（2.8）	
	自立心	3（2.8）	
ネガティブ要因	負担	8（7.4）	15（13.9）
	苦手	4（3.7）	
	不安	3（2.8）	

者からの視点で捉え，子どもと保育者の一体感や園での子どもの様子，練習風景の参観など，【保育の成果】としての印象があることもみてとれた。

次に，「ネガティブ要因」について述べる。15の回答13.9％の学生が，「ネガティブ要因」に該当する回答をした。印象の理由としては，練習時間が長いため自由遊びの時間が減少したり，保育者が子どもに高度なことを望んだり，中には家庭でも練習していたとの回答もあった。このことから，生活発表会の活動が【負担】に感じた学生もいたことが分かる。また，劇あそびのセリフが覚えられなかった苦労や楽器の演奏の取り組みが【苦手】なこととしての印象もあった。さらに，うまくできなかったら怒られるのではないか，大勢の観客の前に出ることを【恐怖】と感じた学生もいた。「ネガティブ要因」「中立要因」と比べると「ネガティブ要因」は少数ではあるが，【負担】【苦手】【不安】といったネガティブな印象がある学生がいることも確認できる。生活発表会は，楽しい思い出としてだけではなく，ネガティブな思い出として捉えている学生もいる。

子どもたちは，生活発表会の活動を【非日常】として捉え，【家族がみてくれること】を期待しながら，【友達と協力】することで【友達の気持ち】を知り，【達成感】や【充実感】を味わう。また，活動をとおして【友達との関係】の難しさや【緊張】などの【葛藤】する気持ちがありながらも，自分で乗り越える【自立心】が育っていく。一方で，生活発表会の活動を【苦手】なこととして捉え，練習するがうまくできなかったらどうしようと【恐怖】に感じる場合もあり，子どもの【負担】となっていることもあるだろう。つまり，生活発表会の活動がポジティブ要因になるのか，ネガティブ要因になるのかは，どのような内容で行うかではなくどのように取り組むかが重要で，それには保育者の環境づくりが大きく影響してくるといえるだろう。

5-3. 生活発表会の活動と「10の姿」の関連について

項目⑥「生活発表会の活動はどの「10の姿」と関連があると思いますか」（複数回答）について345の回答があった。回答の内訳を表５にまとめた。表５でも示したとおり，協同性が73（21.1％）と最も多く，次いで言葉での伝え合いが61（17.9％）と多かった。学生は自分の経験から友達と一緒に活動する楽しさや友達が力を発揮することを感じている。次いで，豊かな感性と表現が42（12.2％）だった。生活発表会の活動は，表現活動として捉え最も多くの回答があると予想していたが，それ以上に，子どもたちは生活発表会の活動から，友達とのかかわりを学んでいると認識していることが分かる。思考力の芽生えは38（11.0％），自立心は34（9.8％），社会生活との関わり32（9.3％），道徳性・規範意識の芽生えは30（8.7％）だった。新しいことを発見し，やり遂げたことで達成感や充実感を得ることや，必要な情報を取り入れ家族との関わりを大切にする，また，自分の気持ちをコントロールして自分の行動を振り返ることも経験しているとの見方もできるのではないだろうか。さらに，健康な心と体は22（6.3％），数量や図形，標識や文字などへの関心・感覚が８（2.3％），自然との関わり・生命尊重が５（1.4％）と少数ではあるものの生活発表会の活動と関連があると回答している。学生の10の姿の捉え方にはばらつきがあるが，多様な面で子どもたちの育ちと深くかかわっていると感じていると捉えていることが確認できた。

表５　生活発表会と「10の姿」との関連

10の姿	n＝345（%）
健康な心と体	22（6.3）
自立心	34（9.8）
協同性	73（21.1）
道徳性・規範意識の芽生え	30（8.7）
社会生活との関わり	32（9.3）
思考力の芽生え	38（11.0）
自然との関わり・生命尊重	5（1.4）
数量や図形，標識や文字などへの関心・感覚	8（2.3）
言葉での伝え合い	61（17.9）
豊かな感性と表現	42（12.2）

項目⑦「生活発表会のどのような活動が「10の姿」と関連があると思いますか。」（自由記述）に対して様々な回答を「10の姿」に分類して表６に項目別に示した。「10の姿」との関連について，協同性は，友達と一緒に一つの劇を作り上げるために，協力して道具や衣装を作り，劇の役を友達の気持ちも考えながら決めるなど，生活発表会に向けて友達と一緒に活動した経験が子どもの学びにつながり，そのためには言葉での伝え合いが欠かせないとの見方ができる。豊かな感性と表現は，本番までの全身での表現あそびや，看板作りなどの活動があげられた。また，思考力の芽生えは，振り付けを考えたり，友達の良さを発見したりすることがあげられ，自立心では，やり遂げる，何度も練習して自信をつける，自分の良いところを見つけることが学びにつながると感じていることがわかった。社会生活との関わり，道徳性・規範意識の芽生えについては，相手の気持ちを考えたうえでの自分の行動がキーワードとなっている。健康な心と体は，本番までの気持ちや見通し，数量や図形，標識や文字などへの関心・感覚は，本番までの日数を数えるなど

表６「10 の姿」と生活発表会の具体的な活動の関連

10 の姿	生活発表会の具体的な活動
健康な心と体	本番に向けての練習，劇に向けて頑張る，本番までにやることに見通しを持つ，劇遊びを楽しみに練習する
自立心	考えて判断する，協力してやり遂げる，友達同士で発表し合う，何回も練習して自信をつける，自分の良いところを見つける，緊張しながらもセリフを言う
協同性	友達と一緒に役になりきることを楽しむ，子ども同士の話し合い，友達と協力して道具や衣装を作る，役決めで友だちの気持ちを知る，得意な子が苦手な子に教える
道徳性・規範意識の芽生え	意見を言い合って相手を尊重する，友達と順番に楽器を使う，役を友達をと話し合って決める，自分の役割を自覚する，クラスで決めたことを守る
社会生活との関わり	保護者や友達の家族の前で表現し関わる，来てくれた人にお礼を言う
思考力の芽生え	自分で考える力，自分たちで振り付けを考える，友達の表現の良さを発見する，友達に伝える方法を考える
自然との関わり・生命尊重	劇あそびに登場してくる動物の気持ちを考える
数量や図形，標識や文字などへの関心・感覚	道具の大きさや数を数える，楽器の配置や順番を覚える 発表会までの日数を数える
言葉での伝え合い	言葉あそび，セリフの言い合い，自分のやりたい役を言葉で覚える，劇あそびの絵本を読む，自分の意見を伝える
豊かな感性と表現	全身で表現する，楽器・身振り・歌・製作などの表現あそび，登場人物の役になりきる，友達の表現や演奏・歌を聞く，生活発表会の看板を作る

の回答があった。さらに，自然との関わり・生命尊重においては，劇あそびに登場してくる動物の気持ちを考えることが関連していると回答している。学生は，生活発表会の活動は「10 の姿」の項目すべてにおいて関連していると捉えていることが確認できた。

6. まとめと課題

生活発表会に関する設問に対し，学生の回答には経験からの様々な思いが回答として現れている。生活発表会は園行事の中でも１年の集大成として位置づけられ，その内容としては「劇あそび」を行っている園が最も多いことが学生の回答から確認できた。生活発表会は楽しい思い出として肯定的に捉えている学生が多かった。肯定的に捉えている理由として，家族が来てくれる嬉しさ，頑張った達成感，友達と一緒に活動する楽しさが上位を占めていた。一方で，ネガティブな思い出として否定的に捉えている学生がいたもの事実である。否定的に捉えている理由として，練習時間が長く自由な時間が減少したり，長いセリフを覚えたりすることが負担になっていたことである。つまり，すべての子どもが最初から楽しいと思える活動を計画するのは難しいが，最初は否定的に捉えていても，保育者の働きかけや環境つくりが重要で，友達と一緒に活動することで楽しい活動として肯定的に変化することが示唆された。生活発表会の活動は，どのような内容で行うかも大切ではあるが，どのように取り組むかが重要であるといえる。

学生の「10 の姿」についての捉え方にはばらつきがあるが，生活発表会の活動と「10 の姿」との関連について多様な面で子どもたちの学びや育ちと深く関連しており，「10 の姿」の項目すべてにおいて関連していることが明らかになった。

本研究は，生活発表会について学生の子どもの頃の体験を基にして調査を行い考察した。生活発表会には様々な内容があり，その内容を他の視点から考察する必要がある。今後は，保育の現場での実践的な活動から，生活発表会の活動と子どもの学びについての検討をしていきたい。

引用文献

相浦雅子，大元千種（1989）「保育における行事に関する調査（1）－生活発表会について－　日本保育学会大会研究論文集 42,350-351.

青戸泰子，菊池愛未，田邊資章（2019）「保育・教育現場における行事活動の意義」人間環境学会紀要 32,1-11.

足立里美（2014）「行事による子どもの成長の検討 －学生の幼児期の行事に対する考えと振り返りから－」岐阜成徳学園大学紀要 53，91-103.

大豆生田啓友（2021）『園行事を子ども主体に変える！11 か園のリアルな実践記録』チャイルド社

生越嘉治（1983）『劇あそびの研究－豊かなコミュニケーションを求めて－』

柴田詠子（2018）「幼児教育における「劇つくり」に関する基礎的研究（１）」札幌大学女子短期大学部紀要 65，127-140.

角尾稔（1964）『保育』ひかりのくに

高橋司，塩野マリ（2003）『年中行事なるほど BOOK』ひかりのくに

田中芙美子，戸田雅美（2004）「雑誌「幼児の教育」にみる「お遊戯会」論－大正 10 から昭和５年－」日本保育学会大会発表論文集 57，44-45.

樋口三紀子（1961）「お遊戯会のあり方 - 幼児の実態からみて考えられるもの -」『幼児教育』60（12），16-22.

兵頭恵子（2019）『行事ことばかけハンドブック』世界文化社

文部科学省（2018）『幼稚園教育要領』

文部科学省（1956）『幼稚園教育要領』

文部科学省（1964）『幼稚園教育要領』

文部科学省（1989）『幼稚園教育要領』

若尾良徳（2017）「幼稚園における生活発表会の形成プロセスにみられる指導の実践－幼稚園教諭の語りを通して－」日本体育大学紀要 47（1），23-34.

参考文献

横山洋子（2021）『子どもの育ちをサポート！生活とあそびから見る「10 の姿」まるわかり BOOK』ナツメ社

幼児の睡眠習慣が交感神経活動に与える影響

Effects of sleep habits on sympathetic nervous activity in pre-school age children

松　尾　貴　司　・　永　井　伸　人　・　辻　　慎太郎
Takashi MATSUO　・　Nobuhito NAGAI　・　Shintaro TSUJI
湊川短期大学　幼児教育保育学科　東京未来大学 こども心理学部　神戸医療未来大学 人間社会学部

徳　島　実友香　・　織　田　恵　輔　・　臼　井　達　矢
Miyuka TOKUSHIMA　・　Keisuke ORITA　・　Tatsuya USUI
大阪成蹊大学大学院　大阪国際大学　短期大学部　大阪成蹊大学　教育学部

要旨

近年，社会環境の変化などから幼児の生活習慣が乱れ，身体的および精神的健康に悪影響を及している。この生活習慣の乱れは自律神経活動にも影響を及ぼしており，自律神経の乱れが小児肥満や心血管系疾患の増加に関与していることが報告されている。自律神経活動の乱れに関係している生活習慣は様々あるが，睡眠習慣も大きな要因の一つであると考えられる。しかしながら，幼児を対象に，睡眠習慣が自律神経系に与える影響についてはほとんど明らかにされていない。そこで本研究では，幼児を対象に，睡眠習慣が自律神経活動に与える影響について明らかにすることを目的とした。その結果，就寝時間が遅く，睡眠時間が短い幼児は，日中の交感神経活動の増加が抑制される可能性が示されたことから，幼児期の良い睡眠習慣は適切な自律神経活動につながり，健全な発育発達を促すことに貢献すると考えられる。

Abstract

In recent years, the prevalence of lifestyle-related diseases in children has been increasing as a result of irregular lifestyles. Disruptions in lifestyle can also affect the autonomic nervous system, which in turn, can negatively affect the physical and/or mental health of children. Among lifestyle habits, sleep habits in particular are thought to affect autonomic nervous activity. However, it is unknown whether sleep deprivation in children affects the autonomic nervous system. In the present study, the aim was to clarify the effects of sleep habits on autonomic nervous activity in pre-school children, focusing on bedtime among sleep habits and examined the effects of children's bedtime on their autonomic nervous activity during the day. Thirty healthy children enrolled in preschool in Osaka participated in this study. To assess sympathetic nervous activity, salivary amylase activity was measured using a handheld salivary amylase monitor. A self-reported questionnaire was used to collect data on children's bedtime last week. It was found that late bedtimes and short sleep durations in pre-school children may inhibit the increase in sympathetic nerve activity during the day, suggesting that good sleep habits in early childhood are thought to lead to appropriate autonomic nervous system activity and contribute to healthy growth and development.

Key words：幼児，睡眠習慣，自律神経活動，交感神経活動

1．緒言

近年, 社会環境の変化などから幼児の生活習慣が乱れ, 身体的および精神的健康に悪影響を及している。先行研究では，朝食の欠食や睡眠不足，TV や動画視聴時間の増加などの生活習慣の乱れから小児肥満が増加していることや[1,10,21]，身体活動レベルが低い幼児ほど，体脂肪が増加しやすいことなどが報告されている[7]。

生活習慣の乱れは自律神経活動にも悪影響を及ぼす。自律神経系は交感神経系と副交感神経系の二つに大別され，恒常性の維持に重要な役割を担っている[5,8]。自律神経活動の混乱は, 身体機能にも影響を及ぼす。例えば, 生活習慣の乱れによる自律神経活動の混乱は心血管系疾患の増加を引き起こす[18]。また，異常な交感神経活動が小児肥満の促進に関与していることが報告されている[11]。つまり，幼児の適切な発育発達を促すためには, 生活習慣を改善し，自律神経活動を適切に維持することが重要である。

自律神経活動の乱れに関係している生活習慣は様々あるが, 睡眠習慣も大きな要因の一つであると考えられる。睡眠不足はストレス応答系の過活動を引き起こし，自律神経活動の異常を誘発してしまう[12]。また，睡眠不足および睡眠の質の低下は，睡眠中の交感神経系の過活動を引き起こすとされており[6]，これらのことから，睡眠習慣の乱れが自律神経系に悪影響を及ぼす一要因として考えられるが，幼児を対象に，睡眠習慣が自律神経系に与える影響についてはほとんど明らかにされていない。

図２　睡眠時間および就寝時間と唾液アミラーゼ活性の変化量との関係

そこで本研究では，幼児を対象に，睡眠習慣のアンケートを実施するとともに，午前から夕方までの交感神経活動の変化を測定し，睡眠習慣が自律神経活動に与える影響について明らかにすることを目的とした。上でも述べたように，睡眠不足は異常な交感神経活動と関連していることから[6]，今回は自律神経活動の中でも交感神経活動に注目した。交感神経活動の指標として，唾液アミラーゼ活性を評価した。唾液アミラーゼは交感神経刺激に反応して唾液腺から分泌される[22]。唾液アミラーゼ活性とカテコールアミンの血中濃度との関連は実証されていることから[2]，唾液アミラーゼ活性は交感神経系の活動を評価する有用なツールである。本研究では，唾液アミラーゼと睡眠習慣に関するアンケートから，幼児の睡眠習慣が交感神経活動に与える影響について検討した。

2. 方法

2.1 対象

大阪府内のこども園に在園する年長児 30 名（5.1 ± 0.3 歳）を対象とした。対象者には事前に研究の趣旨を書面にて十分に説明し，研究参加の同意を得た。また，本研究は湊川短期大学倫理委員会による審査・承諾を得て実施した。

2.2 唾液アミラーゼ活性

幼児の交感神経活動の指標として，唾液アミラーゼ活性レベルを測定した。唾液アミラーゼの測定には，携帯型唾液アミラーゼモニター（NIPRO，大阪）を用いた。このモニターは，乾式化学システムを用いて唾液アミラーゼ活性を自動的に測定することが出来る[15]。また，この携帯型唾液アミラーゼモニターは，乳児や幼児を対象にストレスの評価として用いられている[3,20]。測定方法として，検査ストリップの先端を舌下に 30 秒間置き，検査ストリップを完全に覆うための十分な量の唾液を採取し，唾液中のアミラーゼ活性レベルを測定した。唾液アミラーゼ活性の測定は在園するこども園において，午前 9 時 30 分と午後 15 時 30 分の 2 回行った。

2.3 睡眠習慣に関するアンケート

睡眠習慣に関するアンケートとして，直近 2 週間の睡眠時間および就寝時間に関するアンケートを実施した。アンケートへの記入は対象児の保護者が行った。

2.4 統計処理

対象児 30 名のうち，唾液アミラーゼ活性および睡眠習慣に関するアンケートすべてが評価できた 13 名のデータを解析した。睡眠時間および就寝時間の中央値を算出し，睡眠時間では，9.5 時間未満を短時間睡眠群，9.5 時間以上を標準時間睡眠群に分けた。就寝時間では，22 時未満を早寝群，22 時以上を遅寝群に分け，それぞれの唾液アミラーゼ活性の変化を評価するために，対応のない t 検定を行った。また，睡眠時間および就寝時間と唾液アミラーゼ活性の変化量の関係を評価するために，Pearson の相関解析を行った。検定はすべて両側検定で，P 値 0.05 未満を統計的に有意と判定した。データは平均 ± 標準偏差で示した。統計解析は IBM SPSS 25.0 ソフトウェアパッケージを使用して行った。

3. 結果

睡眠時間において，標準時間睡眠群は短時間睡眠群と比較して，唾液アミラーゼ活性レベルが増加した（P＜0.05，対応のない t 検定，図１；表１）。就寝時間では，早寝群は遅寝群と比較して唾液アミラーゼ活性レベルが増加していた（P＜0.05, 対応のない t 検定, 図１;表２）。また，睡眠時間および就寝時間と唾液アミラーゼ活性の変化量の関係においては，睡眠時間と唾液アミラーゼ活性の変化量との間には正の相関が認められ（r＝0.679，P＝0.01；図２），就寝時間と唾液アミラーゼ活性の変化量との間には，負の相関が認められた（r＝－0.591，P＝0.03；図２）。

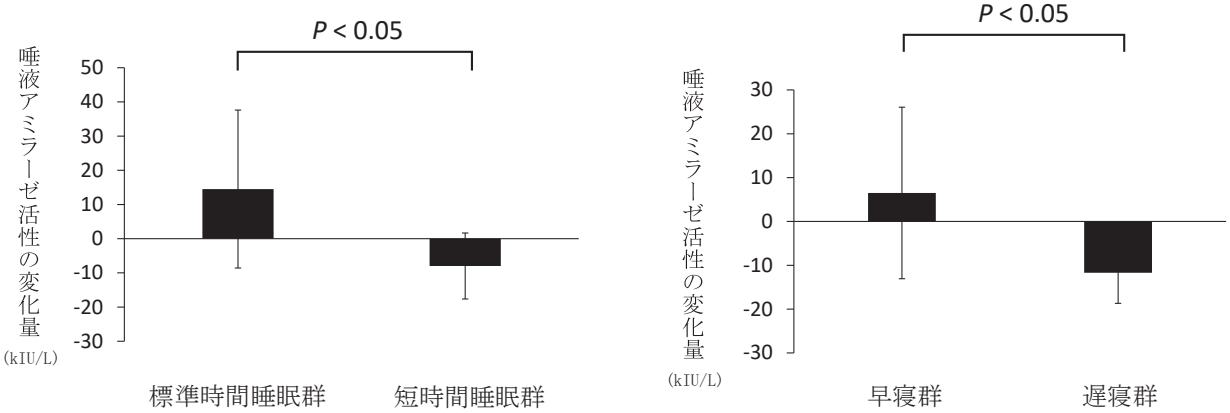


図１　睡眠時間および就寝時間における唾液アミラーゼ活性の変化量

表１　標準時間睡眠群および短時間睡眠群における唾液アミラーゼ活性の変化量

	標準睡眠時間群	短時間睡眠群	P
唾液アミラーゼ活性の変化量	14.5 ± 23.1	−8 ± 9.7	＜0.05

表２　早寝群および遅寝群における唾液アミラーゼ活性の変化量

	早寝群	遅寝群	P
唾液アミラーゼ活性の変化量	6.5 ± 19.6	−11.7±7	＜0.05

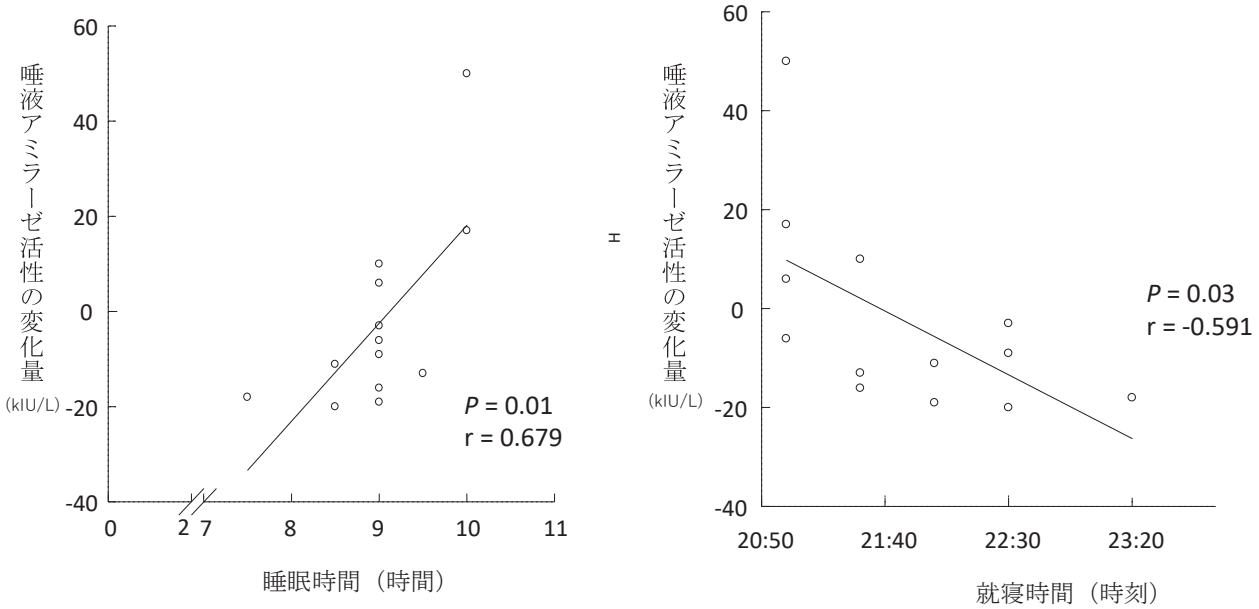


図２　睡眠時間および就寝時間と唾液アミラーゼ活性の変化量との関係

4. 考察

本研究は幼児の睡眠習慣が交感神経活動に与える影響について検討した。その結果，適切な睡眠習慣を維持している幼児は日中に交感神経活動が増加し，さらに，就寝時間が早く，睡眠時間が長い幼児ほど日中の交感神経が増加することが認められた。健常な幼児では，睡眠中に交感神経活動の低下および副交感神経活動の増加が認められ[4,17]，起床後午後にかけて交感神経活動が亢進していく[9,13,14]。しかしながら，睡眠不足は睡眠中の交感神経活動を亢進させ，副交感神経活動を低下させてしまうことが報告されている[6]。本研究では，就寝時間が遅く，睡眠時間が短い幼児ほど日中の交感神経活動が亢進しなかったことから，幼児において，睡眠習慣の乱れが自律神経活動の働きを狂わせ，日中の交感神経活動の増加を抑制していることが示唆された。つまり，幼児期の睡眠習慣の乱れは睡眠中の自律神経活動だけでなく，日中の自律神経活動にも悪影響を及ぼしていることが考えられる。日中に交感神経系が適切に働くことでエネルギー消費量も増加し，小児肥満の予防となることから[11]，適切な睡眠習慣による交感神経活動は健全な発育発達において重要である。また，睡眠不足は交感神経活動だけでなく，副交感神経活動も狂わせてしまう[23]。したがって，良い睡眠習慣は適切な自律神経活動につながり，健康な生活を送ることに貢献すると考えられる。

幼児の睡眠習慣の乱れには，保護者の生活習慣も関与していることが考えられる。子どもは保護者の生活を見本に生活習慣を形成するため，保護者の生活習慣が乱れると，子どもの生活習慣も乱れてしまう。実際，保護者の生活習慣が子どもの精神的健康に影響を与えることや，肥満の親の子どもは脂肪分の多い食品を好む傾向があり，肥満になりやすいことなどが報告されている[16,19]。睡眠習慣も同様に，就寝時間が遅く，睡眠時間が短い親の子どもは睡眠習慣が乱れてしまうことが考えられる。したがって，幼児の適切な自律神経活動の働きを促し，健全な発育発達を促すためには，見本となる保護者が自身の生活習慣を改善することも重要であると考えられる。しかしながら，この点については本研究では検討していないため，保護者と幼児の生活習慣の関係に着目した更なる研究が必要である。

本研究の限界点は唾液アミラーゼ活性では交感神経系の働きしか評価できないことである。本研究では，交感神経活動が睡眠不足によって変化することを仮説としたため，交感神経活動に注目して検討したが，副交感神経活動と睡眠習慣との関係について検討することも意義があると考えられる。

5. 結語

就寝時間が遅く，睡眠時間が短い幼児は，日中の交感神経活動の増加が抑制される可能性が示された。幼児期の良い睡眠習慣は適切な自律神経活動につながり，健全な発育発達を促すことに貢献すると考えられる。

謝辞

本研究を進めるにあたって，多大なご協力をいただきました國領美佐子園長先生をはじめ，先生方，園児，保護者の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

1）Bjørnarå, H. B., Vik, F. N., Brug, J., Manios, Y., De Bourdeaudhuij, I., Jan, N., Maes, L., Moreno, L. A., Dössegger, A. and Bere, E. (2014) The association of breakfast skipping and television viewing at breakfast with weight status among parents of 10-12-year-olds in eight European countries; the ENERGY (EuropeaN Energy balance Research to prevent excessive weight Gain among Youth) cross-sectional study, Public health nutrition, 17, 906-914. doi:10.1017/s136898001300061x.

2）Chatterton, R. T., Jr., Vogelsong, K. M., Lu, Y. C., Ellman, A. B. and Hudgens, G. A. (1996) Salivary alpha-amylase as a measure of endogenous adrenergic activity, Clinical physiology (Oxford, England), 16, 433-448. doi:10.1111/j.1475-097x.1996.tb00731.x.

3）Dezan, C. C., Nicolau, J., Souza, D. N. and Walter, L. R. F. (2002) Flow rate, amylase activity, and protein and sialic acid concentrations of saliva from children aged 18, 30and 42months attending a baby clinic, Archives of Oral Biology, 47, 423-427. doi: https://doi.org/10.1016/S0003-9969(02)00032-8.

4）Furlan, Raffaello, Guzzetti, Stefano, Crivellaro, Wilma, Dassi, Simonetta, Tinelli, Mauro, Baselli, Giuseppe, Cerutti, Sergio, Lombardi, Federico, Pagani, Massimo and Malliani, Alberto %J Circulation. (1990) Continuous 24-hour assessment of the neural regulation of systemic arterial pressure and RR variabilities in ambulant subjects, 81, 537-547.

5）Gibbons, C. H. (2019) Basics of autonomic nervous system function, Handbook of clinical neurology, 160, 407-418. doi:10.1016/b978-0-444-64032-1.00027-8.

6）Huang, Y., Mai, W., Hu, Y., Wu, Y., Song, Y., Qiu, R., Dong, Y. and Kuang, J. (2011) Poor sleep quality, stress status, and sympathetic nervous system activation in nondipping hypertension, Blood pressure monitoring, 16, 117-123. doi:10.1097/MBP. 0b013e328346a8b4.

7）Lanigan, J., Barber, S. and Singhal, A. (2010) Prevention of obesity in preschool children, The Proceedings of the Nutrition Society, 69, 204-210. doi:10.1017/s0029665110000029.

8）McCorry, L. K. (2007) Physiology of the autonomic nervous system, Am J Pharm Educ, 71, 78. doi:10.5688/aj710478.

9）Middlekauff, Holly R and Sontz, Eric M %J Circulation. (1995) Morning sympathetic nerve activity is not increased in humans: implications for mechanisms underlying the circadian pattern of cardiac risk, 91, 2549-2555.

10）Mineshita, Y., Kim, H. K., Chijiki, H., Nanba, T., Shinto, T., Furuhashi, S., Oneda, S., Kuwahara, M., Suwama, A. and Shibata, S. (2021) Screen time duration and timing: effects on obesity, physical activity, dry eyes, and learning ability in elementary school children, BMC public health, 21, 422. doi:10.1186/s12889-021-10484-7.

11）Nagai, Narumi, Matsumoto, Tamaki, Kita, Hiroko and Moritani, Toshio. (2003) Autonomic Nervous System Activity and the State and Development of Obesity in Japanese School Children, Obesity Research, 11, 25-32. doi: https://doi.org/10.1038/oby.2003.6.

12）Oliver, M. D., Baldwin, D. R. and Datta, S. (2020) The relationship between sleep and autonomic health, J Am Coll Health, 68, 550-556. doi:10.1080/07448481.2019.1583652.

13）Panza, Julio A, Epstein, Stephen E and Quyyumi, Arshed A %J New England Journal of Medicine. (1991) Circadian variation in vascular tone and its relation to α-sympathetic vasoconstrictor activity, 325, 986-990.

14）Quyyumi, Arshed A, Panza, Julio A, Diodati, Jean G, Lakatos, Edward and Epstein, Stephen E %J Circulation. (1992) Circadian variation in ischemic threshold. A mechanism underlying the circadian variation in ischemic events, 86, 22-28.

15）Sabbagh, A., Nakata, H., Abdou, A., Kasugai, S. and Kuroda, S. (2021) Fluctuation of salivary alpha-amylase activity levels and vital signs during dental implant surgery, International journal of implant dentistry, 7, 58. doi:10.1186/s40729-021-00339-6.

16）Shakarami, Saba, Veisani, Yousef, Kamali, Koorosh, Mostafavi, Seyed-Ali, Mohammadi, Mohammad Reza, Mohamadian, Fathola, Ahmadi, Nastaran, Fararouei, Mohammad and Delpisheh, Ali %J Shiraz E-Medical Journal. (2019) The association between parents' lifestyles and common psychiatry disorders in children and adolescents: A population-based study, 20.

17）Somers, Virend K., Dyken, Mark E., Mark, Allyn L. and Abboud, Francois M. (1993) Sympathetic-Nerve Activity during Sleep in Normal Subjects, 328, 303-307. doi:10.1056/nejm199302043280502.

18）Speer, K. E., Semple, S., Naumovski, N. and McKune, A. J. (2020) Heart rate variability for determining autonomic nervous system effects of lifestyle behaviors in early life: A systematic review, Physiology & behavior, 217, 112806. doi:10.1016/j.physbeh.2020.112806.

19）Wardle, J., Guthrie, C., Sanderson, S., Birch, L. and Plomin, R. (2001) Food and activity preferences in children of lean and obese parents, International Journal of Obesity, 25, 971-977. doi:10.1038/sj.ijo.0801661.

20）Wolf, Jutta M., Nicholls, Erin and Chen, Edith. (2008) Chronic stress, salivary cortisol, and α-amylase in children with asthma and healthy children, Biological Psychology, 78, 20-28. doi: https://doi.org/10.1016/j.biopsycho.2007.12.004.

21）Yaguchi-Tanaka, Y. and Tabuchi, T. (2021) Skipping Breakfast and Subsequent Overweight/Obesity in Children: A Nationwide Prospective Study of 2.5- to 13-year-old Children in Japan, Journal of epidemiology, 31, 417-425. doi:10.2188/jea.JE20200266.

22）Yamaguchi, M., Deguchi, M., Wakasugi, J., Ono, S., Takai, N., Higashi, T. and Mizuno, Y. (2006) Hand-held monitor of sympathetic nervous system using salivary amylase activity and its validation by driver fatigue assessment, Biosensors & bioelectronics, 21, 1007-1014. doi:10.1016/j.bios.2005.03.014.

23）Zhong, Xu, Hilton, H. John, Gates, Gregory J., Jelic, Sanja, Stern, Yaakov, Bartels, Matthew N., DeMeersman, Ronald E. and Basner, Robert C. (2005) Increased sympathetic and decreased parasympathetic cardiovascular modulation in normal humans with acute sleep deprivation, 98, 2024-2032. doi:10.1152/japplphysiol.00620.2004.

高大連携教育における保育者養成とキャリア形成の研究

～「保育探究類型」プログラムの課題と今後の展望～

Research on the Training of Caregivers and Career Development in Collaborative Education

～ Challenges and Future Prospects of the Childcare Inquiry Type Program ～

佐藤奈美・原口富美子・前川尚子
Nami SATO・Fumiko HARAGUCHI・Shoko MAEGAWA
湊川短期大学　湊川短期大学付属幼稚園　湊川短期大学

歳内喜代美・井上古都美・安井良尚
Kiyomi SAIUCHI・Kotomi INOUE・Yoshihisa YASUI
三田松聖高等学校　三田松聖高等学校　湊川短期大学

静和美・松本直子
Kazumi SHIZUKA・Naoko MATSUMOTO
湊川短期大学　大阪体育大学

要旨

本研究は，高大連携教育プログラム「保育探究類型」が，高校生の保育者への興味関心や進路選択にどのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的とした。アンケート調査とテキストマイニングを用いて，生徒の学習意欲や進路選択に関するデータを分析した結果，高校生は保育実習体験を非常に有意義と感じており，進路選択に大きな影響を与えていることが明らかになった。一方で，ピアノ授業や保育技術検定など，一部のプログラムについては負担感を感じている生徒もいた。本研究の結果は，高大連携教育が生徒のキャリア形成に貢献する可能性を示唆するものである。加えてプログラムの課題も抽出されたので今後の検討が必要となる。

キーワード：高大連携教育，保育者養成，テキストマイニング，保育者養成，質的研究

1．研究の背景

文部科学省（2015）[1]は，グローバル化の進展や人工知能技術をはじめとする技術革新などに伴い，社会構造も急速にかつ大きく変革しており，予見の困難な時代の中で新たな価値を創造していく力を育てることが必要だとしている。その力を『学力の３要素』（知識・技能，思考力・判断力・表現力，主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度）と定め，最終的には高等学校（以下，高校）教育・大学教育を通して育成していくことを目標としている。目標達成に向けて『学力の３要素』を高校教育で確実に育成した上で，大学教育で更なる伸長を図るため，高校と大学で一体的な改革（以下，高大接続改革）を進めていく必要性を示している。生きる力と確かな学力の習得に向けて，ふさわしい教育内容，学習・指導方法，評価方法，教育環境へと大きく転換させることが求められている。

一方で高大接続改革とは，高校教育と大学教育をより密接に連携させることで，多様な学力や能力を評価できる教育制度を目指す取り組みである。（文部科学省，2014）[2]。これにより，学生が自らの能力を十分に発揮できる環境が整えられ，大学での研究や将来のキャリアで生きる力を伸ばす場に変えることができると考えられている。高大接続とは，「高校から大学への進学を円滑にするためのプログラムや取り組み」であり，一方で高大連携とは，「高校と大学間におけるネットワークの構築，教育活動」である。このように国の施策からも高大連携の重要性が示唆される。

筆者の所属するM短期大学（以下M短大）は幼児教育保育学科を有しており，同学園に高等学校と７つのこども園（幼稚園，保育園含む）がある。本学園も高大接続改革の推進を受け，学園全体で新たな時代に適応できる有意な社会人の育成をめざし，多様な取り組みを実施している。取り組みのひとつとして，保育者に興味関心をもつ高校生がより深く学べるよう，同学園の高等学校（以下Ｓ高校）に「保育探究類型」を開設した。このコースを選択した高校生はM短大で保育に関する専門的な講義（以下，授業）を受講することができる。高校と大学が同敷地内にある利点を活かした高大連携により実現されたプログラムである。大学で保育に関する授業や演習，加えて附属の園で実習体験を繰り返しながらM短大への進学，さらには附属幼稚園，保育園へのキャリア教育まで視野に入れた５か年プロジェクトとして一体的な教育に取り組み始めた。

中央教育審議会（文部科学省，答申，2021）[3]は，学

校と社会及び学校間の円滑な接続を図るため，キャリア教育を小学校段階から発達段階に応じて実施することの必要性を掲げている。「一人一人の社会的・職業的自立に向け，必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して，キャリア発達を促す教育」と新たに定義し，キャリア教育の意義や必要観が高まっている。加えて「一定または特定の職業に従事するために必要な知識，技能，能力や態度を育てる教育」と定義し，社会での自己実現に向けての教育についても不可欠としている。実際にキャリア教育として，全国でも保育者養成課程を有する大学が保育に関心をもつ高校生にむけて，出張授業や公開講座，家庭科授業の特別講師など高大連携の取り組みが実施されている[4)]。一方で，保育業界は保育士不足や不適切保育，離職率の高さなど多様な問題を抱えて久しい。保育者養成校における学生教育については，新たな時代に適応する人材の育成に向けて，より専門性をもった質の高い保育者を養成していくことが急務となっている。井上，山内（2006）[5)] は高校の家庭科教育の授業において，保育の授業を実践した結果，生徒の学習意欲は大幅に高まったことを示唆している。

そこで本研究では，高校生のキャリア教育の一環として，保育者を養成する高大連携教育の可能性に着目したい。３年間のプログラム，「保育探究類型」を修了した生徒のアンケート調査と自由記述をもとに，テキストマイニングにより検討する。

2. 研究の目的と意義

本研究の目的は，短大での「保育に関する授業」における高大連携教育の在り方について「保育探究類型」を選択した生徒への調査を通じて実態を明らかにし，検討を加えることである。さらに，これらの調査結果から現状のプログラムの課題を抽出する。加えて，大学で行う授業を高等学校において実施することで，保育者をめざす高校生にとってどのような示唆が得られるかについて考察する。それによって，高等学校教育，保育士養成の短期大学教育, キャリア教育（保育者としてのキャリア）の三者の一体的な改革を進めることが極めて重要であるとし，これらの改革に向けての本学の取り組みについて示唆を得ることが期待される。加えて，「保育探究類型」の現状や課題が明らかになることにより，高大連携教育の今後のあり方を模索する。

3. 研究方法

3.1　対象者と方法

調査対象者はＡ高校の保育探究類型に所属していた生徒 19 名である。研究方法は以下のデータを用いて分析をすすめる。まず，①３年間のカリキュラムを４つの分野に分類し，それぞれの分野において授業内容と学習成果について検討する。続いて，②プログラムを修了した 19 名にアンケート調査を授業最終日に実施した。倫理的配慮は生徒に対して本研究の目的と内容，個人情報の保護と管理，研究の協力については任意であることを口頭による説明をした。加えてアンケート調査にも直接書面で説明しており，提出することで承諾を得た。

3.2　分析方法

質的研究では個々を詳細に把握することができるが得られた結果の客観性や実用性は高くない。そこで本研究では両方の研究手法を併用した混合研究のひとつであるテキストマイニングの手法を採用した。テキストマイニングはテキストデータを様々な計測的方法で分析し言葉同士にみられるパターンや規則性を見つけ情報を取り出す技術である（樋口，2014）[6)]。分析処理により少数の重要な意見を見落としたり，文脈が消失したりすることで誤った解釈をする可能性があるため，繰り返し確認しながら分析を進めた。さらに全ての記述を統合して生徒の感じた生の意見を検討できるよう，共起ネットワーク分析を行った。

3.3　プログラム内容

３年間の高大連携教育プログラム内容（表１参照）については，保育者を目指す高校生が最も心配しているといわれている「ピアノ」を中心に本学独自の内容を設定した。１年生の「保育入門」２年生の「音楽基礎」３年生の「ピアノ入門」は大学の卒業単位として認定している。それ以外に保育検定対策や，実習体験，大学生との交流体験など多彩なプログラムを実施している。一方で，生徒に負担のないように短期大学での授業の時間は，高等学校で取り組んでいる「自己発見プログラム（総合的な探究の時間）」や「クエストエデュケーション」といった３年間を通してキャリア形成をサポートするための時間を「保育探究類型」の時間に当てている。加えて年２回地域連携会議でプログラム等についても客観的な視点から課題を指摘してもらい，５年間の学びを充実させるようにしている。また，保育探究については，短大入学前に附属園への体験実習を行うことで，短大進学後の意識向上に加えて，入学後も附属園での実習があるため，継続して地域の中での保育について学ぶ機会を設けている。

4. 結果及び考察

4.1　アンケート調査の結果と考察

表１の授業を４つの分野に分けてアンケート調査を行った。結果をふまえて学習成果を実践力，加えて進路意識に沿って検討していく。授業は３年間で検定技術対策や実習も含めると 100 回程度実施されている。１番回数が多いのはピアノの授業になる。継続力が学習成果としてつながりやすいので，数を多くとった。次に，保育技術検定対策講座になる。それぞれが４つの分野で技術を身につけなければならないので，授業数も増えることになる。続いて，上記２つ以外の授業を保育に関する授業とした。担当の講師も一人ではなく，短期大学により親しみをもてるように，数人の講師にお願いをした。最後実習体験で，園までの距離や授業内で実施したいなどの物理的な問題もあり３年間で最も少ない回数となる。以上の状況から,「保育に関する授業」「保育実習体験」「ピアノの授業」「保育技術検定」の４つの分野に分けた。設問は各分野においてそれぞれ評価してもらう。評価は５件法「あてはまる，だいぶ当てはまる，どちらともいえない，あまりあてはまらない，あてはまらない」とした。設問内容は以下の６つとした。「その通り」と思う方が右（あてはまる）になるという説明を加えて，より応えやすいようにした（図１）。

4.2　ピアノの授業について

ピアノの授業は保育探究類型の大きな特色のひとつである。２年生で「音楽基礎」３年生で「ピアノ入門」とうＭ短大の単位認定科目を科目等履修生として受講で

表１　カリキュラム内容

学年	高校名称	短大科目名	回数	内容	場所	時間			
			オリエンテーション		短大教室	12:00～			
1年生	特別講座	※保育入門	①②③	保育者としての心構えと職務、保育の実際、総合的な基礎知識	短大教室	9:05～10:35	10:45～12:15	13:00～14:30	
			④⑤	実習体験	幼稚園	9:00～12:00			
			⑥⑦	実習体験	幼稚園	9:00～12:00			
			⑧	実習の振り返り	短大教室	12:30～14:00			
			⑨⑩⑪⑫	実習体験	幼稚園他	9:00～16:00			
			⑬	子ども理解と保育について	短大教室	16:00～17:30			
			⑭⑮	保育の基礎　まとめと発表	短大教室	9:05～10:35	10:45～12:15		
		特別保育講座	実習体験		幼稚園他				
			保育遊び体験		短大教室				
2年生	総合探究	※音楽基礎	1~14	音楽理論の基礎とピアノレッスン	短大レッスン室	総合探究の時間 5限・6限(高校) 13：35～15：25			
			15	発表会					
		保育講座	保育	オリエンテーション	短大教室				
			言語	保育内容「言葉」	短大教室				
			造形	保育内容「表現」	短大教室				
			看護	乳児保育	短大教室				
			保育	保育実習指導	短大教室				
			実習	実習体験	幼稚園				
3年生	クエストエドュケーション	※ピアノ入門	1~14	音楽の基礎とピアノレッスン	短大レッスン室	クエストエデュケーションの時間５．６限（高校） 13：35～15：25			
			15	発表会					
		保育講座・専門講座	1	保育実践（わらべ歌とふれあい遊び）	短大教室				
			2	保育実践（パラバルーン）	短大教室				
			3	保育実践（子育て支援センター見学）	短大教室				
			4	子どもと造形表現	短大教室				
			5，6	子どもとお茶の交流会	高校	１－４限（A.M）			
			7，8	実習体験	幼稚園				
			9	保育探究コース　総まとめ	短大教室	13：00～15：30			

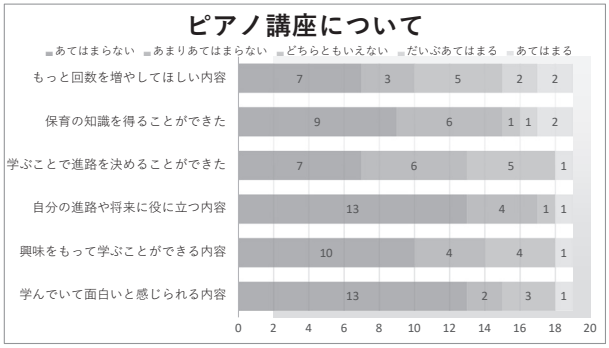
	あてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	だいぶあてはまる	あてはまる
学んでいて面白いと感じられる内容					
興味をもって学ぶことができる内容					
自分の進路や将来に役に立つ内容					
学ぶことで進路を決めることができた					
保育の知識を得ることができた					
もっと回数を増やしてほしい内容					

図１　アンケート調査

き，認定されるとそのままM短大に持ち越すことが可能となる。M短大と同様，数人の専門講師による個別のレベルに合わせた丁寧な指導が実施された。保育者の専門性技術のひとつとして「音楽」は切り離せないものであり，減少してきたとはいえ，ピアノを必要とする現場の声は多い。そのため保育探究類型を選択した理由に「ピアノを習うことができるから」と答える生徒も多い。保育者養成校の学生は，ピアノを弾く，楽譜を読む，などの技術面よりも，緊張や自信がないといった精神面を悩みとして挙げており，多くの学生がピアノに対して不安を感じている（小林，2020）[7]。高校生の間に発表の場や個人レッスンの機会を多く取り入れることでそういっ

た不安は解消されることが予測できる。少しでも保育の専門性を高める一助になることを願い，スキルアップだけに捕らわれないよう丁寧な指導を実施した。しかしながら，アンケート結果によると全体的に「当てはまらない，あまり当てはまらない」と否定的な意見が多く見られた。「自分の進路や将来に役立つ内容，学んでいて面白いと感じる内容」など保育者への将来を見据えてピアノを多く取り入れるカリキュラムにした結果が，逆に生徒への負担感を増加させたと予想される。この結果は，今後のカリキュラムの再検討が課題となる。

表２　ピアノ講座について（n=19）



4.3　実習体験

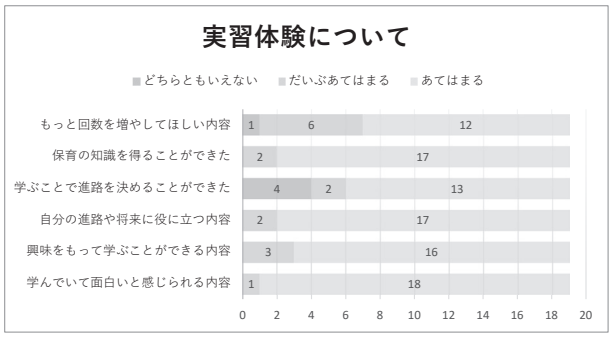
実習は生徒が最も楽しみにしている内容であり，職業体験にもなる。平日の授業時間の中でという状況により，３年間で実際に実習を体験できる数は８日程度になる。少ない実習体験の中で生徒は子どもと全力で向き合い，「子どもが好き」という純粋な気持ちを素直に表現してくれる。保育の学びや実習事前指導が不十分の中，M短大の科目等履修生として送り出すことになる。しかし，それゆえに本来の「保育者になりたい」という一途な気持ちで子どもと関わっているように見受けられる。尾城・吉川（2010）[8] によると，保育体験学習は，送り出す教員側の不安や困難さ，問題点も多いが，それ以上に効果の高いもので，実習参加の高校生だけでなく，園の子どもたち，引率教員，幼稚園教諭，保育士のそれぞれが互いに新たな発見をして，成長しあえる場となっていることが明らかになっている。実際に生徒の振り返りには「子どもがとてもかわいくて楽しかった」「実際に絵本を読んだりできて勉強になった」「先生は何でもできてすごいと思った」などの意見が多く見られる。筆者を含め教員は，子どもと本気でぶつかりながら関わっている生徒の姿を見て，高校生ならではの純真さ（子どもがかわいいと思う素直な気持ち）から刺激や学びを得ている。

アンケート結果をみても全ての項目において，「どちらともいえない」以上，「大分あてはまる，あてはまる」と応えており，「学んでいて面白い内容」では全員に当てはまるが「あてはまる，だいぶあてはまる」と応えている。保育者を目指す高校生が子どもと関わることがどれだけ「面白い」と感じているのかが明らかになった。

4.4　保育技術検定対策授業

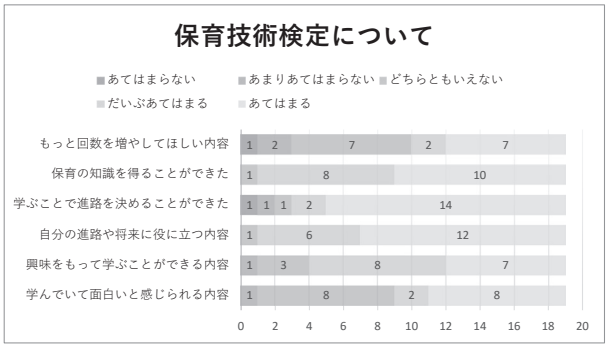
保育技術検定とは公益財団法人全国高等学校家庭科教育振興会が高等学校において実施している保育の技術レベルを検定するものである（文部科学省後援）[9]。「専門的技術の向上を図り，将来保育及び児童等の福祉関連の仕事に従事できる能力・資質や実践的態度を育てる」こ

表３　実習体験について（n=19）



とを目的とし，保育関係の進路を希望する高校生の全国的な指標となっている。「音楽･リズム表現」「造形表現」「言語表現」「家庭看護」の４分野について４級から１級までの達成基準を設定して，毎年年２回実施している。保育技術検定は保育科のある高等学校でプログラムの１つとして実施されており，Ｓ高校の保育探究類型も取り入れた。生徒全員が３級獲得を目指す。試験合格に向けて，４分野において各専門である大学の講師が通常の授業とは別にそれぞれ２，３回程度の対策授業を実施した。それにより，19名の生徒全員が３級を獲得し，うち１名は２級を取得した。保育技術検定は紙芝居や赤ちゃんのお世話，折り紙，ピアノと検定の合否にかかわらず学習したことは実践力になる。保育の学びが見えやすいので生徒は主体的に取り組んでいた。実際に絵本の読み聞かせを実習体験で実践することもあり，学習成果が実践力につながっていることが実感できている意見もあった。表４から「学ぶことで進路を決めるのに役だった」「自分の進路や将来に役立つ内容」に対して，９割があてはまると応えている。一方で１名に限るが全項目で当てはまらないと回答しており，保育に興味をもっていたが，保育技術検定に関しては負担となっていたのか，あるいは途中で進路変更に気づき，意欲が消失したのか，アンケートからは読み取れない結果であった。

表４　保育技術検定対策について（n=19）



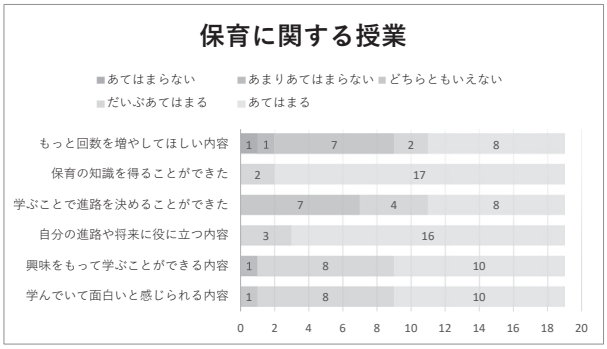
4.5 保育に関する授業

高校生の最初の授業は「保育入門」で，認定されると本学への進学であれば持ち越すことが可能となる。基本的な保育の授業と実習体験に向けての指導が中心となり，８月の夏季休暇を利用して実習と授業を繰り返しながら体験する。他に短期大学の大学生との交流も取り入れた。パラバルーンを一緒に取り組んだり，短期大学生によるパネルシアターやエプロンシアターの実演を観たり，実践的な内容に加え，保育の授業をイメージできる

ような授業を意識した。また，先輩である短期大学生にキャリアに関する悩みを直接相談できるような場を設けるなど，保育だけに留まらず高大連携の特質を活かしながら実施した。

その結果，実習体験と同様「保育の知識を得ることができた」と答える生徒が多く見られた。また，「自分の進路や将来に役に立つ内容」でも高い評価が見られた。

表５　保育に関する授業について（n＝19）



4.6 自由記述の分析結果

「負担になったこと」「学びたかったこと」のそれぞれの記述内容を，意味の異なる分章で区切りコードを作成した。自由記述の分析はKJ法（川喜田，1997）[10] を参考に質的分析を参考に行った。KJ法は文化人類学者である川喜田二郎によって創始されたデータ集約に関する一つの技法である。コードはそれだけでも意味が分かる文節とした。その後，類似するコードでカテゴリーを構成した。なお，分析の下位カテゴリーは《　》，カテゴリーは【　】で示し，記述例を「　」を加えながら学生の意識を概要すると次のようになる。

負担になったこと（表６）は【ピアノ授業】【検定対策】【保育探究類型】の３つのカテゴリーとなる。特に【ピアノ授業】の負担感は多く見られた。下位カテゴリーは《練習の苦労》《発表のプレッシャー》とあり，ピアノに対する苦手意識や，練習の困難さ，発表の緊張感，時間の問題などが要因として考えられる。次に【検定対策】も苦手意識と勉強の困難さが読み取れる。さらに【保育探究類型】は３年間のコースの厳しさがあげられる。「保育探究類型に入ることで，三年間保育を学ぶことが求められ，本気で学びたい人には楽しめるが，軽い気持ちで入ると厳しいと感じる。」など３年間の保育に対する学び自体が負担になっている。このようにピアノの授業や発表，保育コースの厳しさ，保育技術検定に向けての練習の苦労などが生徒の負担になっているのが明らかになった。しかしながら，この結果は授業の数に比例していることも考えられる。

学びたかったこと（表７）は【実習体験】【保育実践方法】【保育内容】【早期の検定対策】の４つのカテゴリーになった。特に実習の増加を要望しているコードは６つと多く，実習の増加を希望しているのがわかる。次に【保育実践方法】となり《遊び･自然体験》《子どもへの対応》を学びたかったとしている。《子供の対応》は実習の体験による気づきだと考えられる。続いて【保育内容】となり，遊びに関しては環境や心理，かかわりかた，音楽教育など，より専門性を高めるための学びを期待していることが伺える。加えて，【早期の検定対策】を望む声もあり，《検定への準備》に余裕をもって取り組みたいことが読み取れる。

表６　負担になったこと（n＝24）

	カテゴリー	下位カテゴリー	記述例	コード番号	コード数
負担になったこと	ピアノ授業	練習の苦労	ピアノ講座が多かった	5	4
			ピアノを一人で練習する時間を長くしてほしかった	7	1
		発表のプレッシャー	本番に弱いのでピアノの練習の一回一回がしんどかった	10	7
			数人の前で一人前に出てピアノを発表すること	13	2
			ピアノであの部屋にいることやできなかった時の悔しさ	2	3
	検定対策	難易度	検定が難しくて勉強が大変だった	16	3
	保育探究類型	保育コース	三年間保育に固定される	19	3
			みんなの前で絵本や紙芝居を読み聞かせたをしたこと	21	1

表７　学びたかったこと（n＝29）

	カテゴリー	下位カテゴリー	記述例	コード番号	コード数
学びたかったこと	実習体験	実習増加	実習にもっと行きたい	3	6
	保育実践方法	遊び・自然体験	多種類の手遊び	8	5
			泥団子など外で遊ぶなど、自然に関する内容	1	5
		子どもへの対応	注意するときの言葉がけやけがをしたときの対応	10	1
	保育内容	音楽教育	歌を学びたかった	18	3
			バイエル以外のピアノの曲	6	3
		保育の知識	子どもの心理	12	3
			幼稚園と保育園の違い	10	1
	早期の検定対策	検定への準備	一年生の時に検定を受けられなくても勉強したかった	5	2

4.7　テキストマイニングによる分析結果

さらに検討を深めるため，「負担になったこと」「学びたかったこと」に加えて，アンケートの最後にある「感想」の自由記述を全てデータとしてまとめて，テキストマイニングを行った。テキストマイニングは，質的データを量的に分析することを目的としている。本研究でも分析者の恣意性を極力排除するために，有益な情報を取り出すための手法として使われている分析には，株式会社ユーザーローカルが開発したAIテキストマイニング[11]を使用した。単語の出現頻度，係り受け解析（「名詞」に係る「形容詞」「動詞」「名詞」についての解析結果を表示），文書要約を行った。なお生徒が記述したテキストデータの前処理として，「負担になったこと」「学びたかったこと」については語尾に「が負担であった」「が学びたかった」とデータの意味が変わらないように前処理をした。

出現頻度は文章中に出現する単語の頻出度をスコアの高い上位を表に示した（表８）。単語ごとに表示されている「スコア」の大きさは，与えられた文書の中でその単語がどれだけ特徴的であるかを表しており，通常はその単語の出現回数が多いほどスコアが高くなる。しかしながらどの文書にもよく現れる単語についてはスコアが低めになることもある。本研究ではスコアの高い単語を重視して解析している。

表８　各品詞のスコアと出現頻度　上位

名詞	スコア	出現頻度	動詞	スコア	出現頻度	形容詞	スコア	出現頻度
保育	31.92	14	学ぶ	4.69	13	難しい	0.29	6
ピアノ	15.66	21	増やす	1.06	6	ほしい	0.2	8
実習	15.14	13	弾ける	0.98	3	長い	0.1	3
負担	14.71	17	かかわる	0.79	2	多い	0.05	4
検定	11.25	8	触れ合う	0.55	1	楽しい	0.04	4
泥団子	6.79	2	接す	0.22	1	良い	0.03	5
探究	4.92	2	できる	0.21	13	しんどい	0.03	2

係り受け解析は，語句の「修飾－被修飾」関係を見つけるための解析方法である（表９）。「スコア」が高いほど，よりその係り受け関係が重要であることを示している。「名詞×形容詞」では「実習×ほしい」が挙げられ，「名詞×動詞」では「実習×増やす」と実習の回数を増やしてほしいという要望が示唆されている。また，「探究（保育）×いい」や「こども×かかわる」という言葉も高スコアを示しており，『こどもとかかわることができるからいいと思った』『保育を目指すなら保育探究コースに入った方がいいと思う』などの記述においても保育探究類型での体験に満足している生徒の思いが現れている。「名詞×名詞」では「ピアノ×練習」「検定×勉強」が上位に位置づけられた。

表９　係り受け解析の結果　上位

名詞×形容詞	スコア	出現頻度	名詞×動詞	スコア	出現頻度	名詞×名詞	スコア	出現頻度
実習-ほしい	2.22	4	実習-増やす	2.86	4	ピアノ-練習	3.33	5
本番-弱い	2	2	保育-入る	2.4	6	検定-勉強	2	3
最初-多い	1.2	2	実習-できる	2.38	5	実習-おしゃべり	2	2
看護-難しい	0.86	2	子ども-かかわる	2	2	子ども-おしゃべり	2	2
保育-いい	0.67	1	人前-出る	2	2	検定-授業	1.5	2
探究-いい	0.67	2	おしゃべり-遊	2	2	ピアノ-発表	1.5	2

共起とは単語のセットが同時に出現することであり，文章中に出現する単語の出現パターンが似たものを線で結んでいる（図２）。出現数が多い語ほど大きく，線が太くなる。共起図からも，「ピアノ－負担」は大きく表出されている。しかし，「探究－コース－入る－弾ける」と共起されていることから，保育探究を選択すればピアノが弾けるようになるといった生徒の期待感もみえる。

テキストマイニングによる分析結果と記述内容から，多くの生徒がピアノや保育検定に対する負担感を感じているのは明らかである。「ピアノの時間が長すぎる」「検定の授業が難しかった」というような具体的な意見もあり，苦手意識がみえる。一方で，ピアノや検定が学びの喜びや充実感にも結びついており，「ピアノや工作などを，やっていくにつれて頑張ろうって思えることができた」「弾けたときの喜びが最高だった」「検定の授業がおもしろかった」などの意見もみられた。負担ではあるものの学びの中で成長や期待を感じており，その必要性は認識している。加えて全ての結果からも読み取れるように，実習の重要性を何よりも感じており，「実習を増やしてほしい」「実習で子どもとおしゃべりできたことが楽しかった」など19人の中で14名に「実習」というワードがポジティブに捉えられて記述されていた。３年間の授業と進路意識を考察すると，４名以外は保育・幼児教育の学校へ進学をした。さらに，15名のうち10名は本学への進学を決めている。中でも「実習体験・保育技術検定対策」では「学ぶことで進路を決めることができた」と多くの生徒が答えており，今後のプログラムにおいて見直すポイントが示唆された。

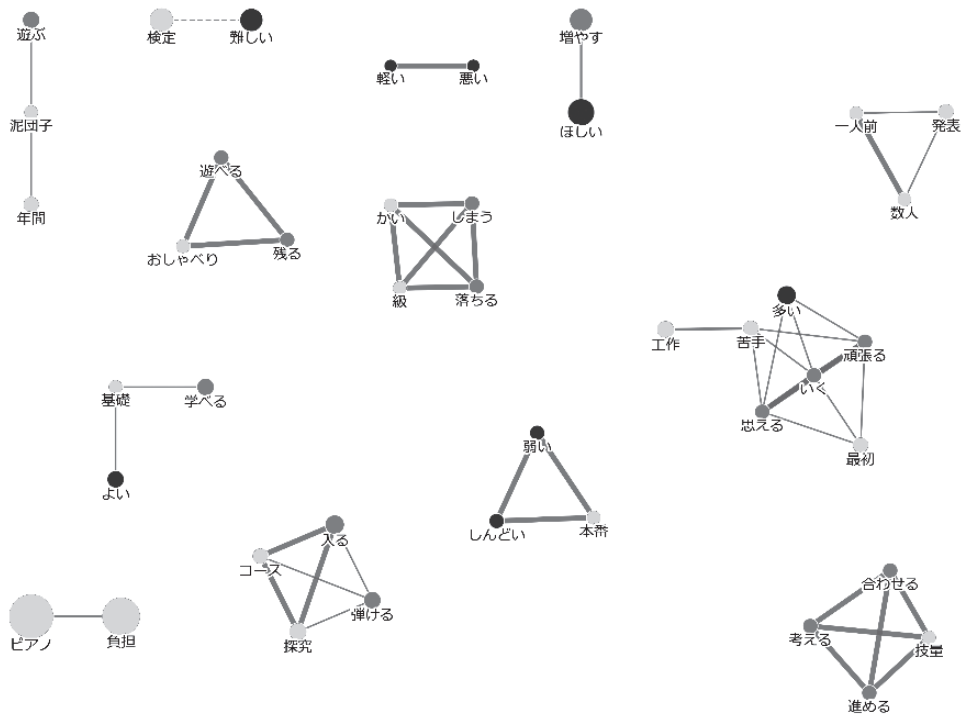


図２　共起キーワードの結果

5. まとめと課題

現代社会で生きる力の育成を目的とした高大連携教育は，社会に開かれた教育課程が必要となる。文部科学省(2014)[12] はこれからの教育課程の理念として地域の人的・物的資源を活用したり，放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし，学校教育を学校内に閉じずに，その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させることとしている。本学園の取り組んでいる「保育探究類型」は高校，短期大学，さらに附属園との連携教育であり，まさしく新たな教育課程を実現させているといえる。

本研究でも保育探究類型を選択した生徒が，実習体験や保育の学習を通してキャリア形成の一助として認識していたことは示唆された。専門的知識の習得，松下・甲斐（2020)[13] の高校家庭科教育における調査によると，保育体験学習が親性準備教育に有効であったことが示されている。親性はたとえ自分の子どもを持たない場合でも，次世代の再生産と育成は社会全体の責任であることから社会の一員としてすべての人が備えるべきものであり，今後，保育体験学習の実施と充実を図る必要性がある。キャリアとして保育にかかわらなくても，保育教育の充実のために高大連携の可能性は期待される。一方，実践を進める中で改善すべき課題も抽出されつつある。その主なものを下記に列挙する。

①実習体験の時間と日数
②ピアノ授業の時間と内容の修正
③保育に関する授業の内容の修正
④保育検定対策授業の早期化とあり方
⑤保育探究類型の柔軟性

以上が本研究により抽出された検討課題である。高大連携教育プログラム「保育探究類型」は，高校生のキャリア形成に大きく貢献する可能性を秘めている。しかしながら，より効果的なプログラムにするためには，高校生たちの声を聞き，プログラムを不断に見直し，改善していくことが重要となる。例えば，実習体験の日数については多くの生徒が足りないと感じており，１日でも子どもと関わりたい思いに応えながらも，「かわいかった，楽しかった」で終わらせることなく，より専門的な学びになるようなプログラムにすることで効果が上がる。

「保育探究類型」における高大連携教育は，高校生の段階から保育の専門知識を学び，実践的な経験を積むことができる貴重な機会である。本研究を通じて，高校生が保育者に強い関心を持ち，将来の保育者として活躍したいという意欲を持っていることは明らかになった。今後も長期的な視点で，高大連携教育を受けた学生が実際に保育者としてのキャリアを選択するのか，またどのように活かされていくのかなどを調査していきたい。それによって高大連携教育の成果を地域社会に還元していくことにつながり，それこそが保育者養成校の役割といえるのではないだろうか。

謝辞

本研究は 2023 年度湊川短期大学学内科学研究補助金の助成をうけたものです。本研究を行うにあたり，ご協力くださいました保育探究類型の生徒諸子と，携わってくださった先生方，附属幼稚園を含め全ての関係者様に心から感謝申し上げます。

引用文献

（１）文部科学省（2015）１月　高大接続改革
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/index.htm（2024/10/20 閲覧）
（２）中央教育審議会（2014）
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1354191.htm（2024/10/20 閲覧）
（３）中央教育審議会（2021）

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm
（2024/10/20 閲覧）
（４）中央教育審議会（2017）
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/020-17/siryo/05042201/006.htm
（2024/10/20 閲覧）
（５）井上えり子・山内拓司（2006）高大連携による保育の授業研究（1）―教育大学と公立高校（定時制）の連携―日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー発表要旨集，49（0），pp24-24.
（６）樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版 .
（７）小林梨紗（2020）保育のピアノ演奏場面に対する学生の意識と緊張・不安低減への課題，聖徳大学児童学研究所紀要，22，pp11-18.
（８）尾城千鶴, 吉川はる奈（2010）．高等学校「家庭科」における保育体験学習の効果と課題教育科学，埼玉大学紀要，59（2），pp.59-67.
（９）文部科学省（1993）全国高等学校家庭科教育振興会　http://www.katei- ed.or.jp/shinko/hoiku.html
（2024/10/01 閲覧）
（10）川喜多二郎（1997）KJ 法入門コーステキスト 4.0kj 本部，川喜多研究所 .
（11）ユーザーローカル AI テキストマイニングツール
https://textmining.userlocal.jp/
（12）文部科学省（2014）基本的方向性：社会を生き抜く力の養成
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364187.htm
（13）松下律子・甲斐みちる（2020）.「親性準備教育」及び「保育者養成」における高大連携について，宮崎学園短期大学紀要（12），pp.31-41.

参考文献

伊藤葉子（2007）．中・高校生の家庭科の保育体験学習の教 育的課題に関する検討，日本家政学会誌，（58），pp.315-326.
太田尚孝・米正竜太（2021）高校生と大学生が共に学ぶ短期集中型の地域学習プログラムの開発・実践・評価―兵庫県立北摂三田高等学校と兵庫県立大学との高大連携事業を事例に―，都市計画報告集，20，pp.292-297.
神原信幸（2011）．日本とアメリカの比較から高大連携の政策アプローチを再考する，高等教育研究（14）
常見俊直・仲野純章（2021）大学生を活動主体者として巻き込んだ新たな高大連携事業の検討と実践―高校生と大学生による課題研究の協働推進―，日本科学教育学会集，45，pp.593-596.
平井正朗（2024）学校経営ストラテジーの再構築Ⅱ―高大連携に向けてのカリキュラム・マネジメント―，教育総合研究叢書，（17），pp.197-209.
松本直子・原口富美子・浅井祐子・吉田馨・歳内清美・橋本ゆかり（2022）高大連携における保育者養成の保育環境・人的環境の意義と実践報告，湊川短期大学紀要，（58），pp.79-83.

領域「表現」における子どもの自己実現についての一考察

―保育実践を通して―

A consideration of children's self-realization in the area of "expression"

―from the practice of children playing with clay―

前　川　豊　子　・　安　井　良　尚

Toyoko MAEKAWA　・　Yoshihisa YASUI

京都西山短期大学　教授　　湊川短期大学　教授

Abstract

The purpose of this study is to deepen the content of plastic arts play in early childhood education. Formative expression includes many opportunities for spontaneous and unconstrained play-like experiences and has attracted attention as an activity that leads to mental openness and stability.

The analysis and discussion of [plastic arts play], using involvement observation and episodic descriptions, showed that the act of the child facing the teaching materials is itself an "expression".

キーワード：幼稚園教育要領「表現」，教材研究，素材との対話，養成校の課題と役割

はじめに

本研究の目的は，幼児教育における造形遊びの内容を深めることにある。保育所保育指針の領域「表現」(2017年）にみられる（ウ）内容の取扱い「表現の過程を大切に」に改めて注目したい。この「結果よりも過程重視」の明示は，幼児期から工夫や創造，発見の経験によって自尊感情や有能感を育てようとする観点が反映されたことによる。さらに，保育所保育指針解説では，幼児期の子どもの表現行為の特徴を以下のように述べている。「子どもの場合，必ずしも，初めにはっきりとした必要性があって，かいたり，つくったりしているのではない。」「自分でかいたり，つくったりすることそのことを楽しみながら，次第に遊びのイメージを広げたりする場合もある。」[1] さらに「子どもの自己表現は，内容の面でも方法の面でも，大人からは「素朴に見える形で行われることが多い」[2] 特徴がある。「大人が考えるような形式を整えた表現にはならない場合や表現される内容が明快でない場合も多いが，保育士等は，そのような表現を子どもらしい表現として受け止めとめることが大切である。」[3] 保育者にとって重要なことは子どもに共感することであり，そのことで子どもは保育者への信頼感と表現する喜びを感じ，表現への意欲を高めていくと述べている。

高等教育機関における学生の学力低下に加えて，自己表現力や自信，コミュニケーション能力等の低下が問題視されている今日，保育者養成における表現の授業にも，その力量形成への貢献が期待されている。造形表現は，自発的で制約のない遊びのような経験のチャンスを数多く含んでおり，心の開放と安定につながる活動として注目される。

そのため筆者は，子ども（４歳児と５歳児）を対象とした「造形遊び」を実践し，関与観察とエピソード記述を用いて分析・考察した。

研究方法

下記（１），（２）の方法で研究をおこなう。

（１）本学附属幼稚園での２日間における保育実践（４，５歳児）

①粉末粘土と水で遊ぶ

（2024年８月８日午前10時～12時30分）

②粘土の絵の具で遊ぶ。絵を描く

（2024年８月９日午前10時～12時30分）

（２）保育の中での表現活動における自己実現についての考察

（１）は，保育実践を目的とした教材研究並びに実践の指導，観察から得られた知見の分析，考察を通し，子どもの表現活動のあり方考える。子どもの表現の本質を求める。

（２）は，実践②で見られた粘土の絵具で遊ぶ女児の姿，及びＳ保育園での絵具遊びを発展させていった男児の姿。この２つの，教材やモノとの結びつきをきっかけに遊びこんでいく子どもの姿から子どもの自己実現について考える。

保育実践の方法

場所：本学付属幼稚園

前川，安井と，記録担当の本学幼児教育保育学科の学生２名にて行った。（附属幼稚園の先生方にもサポート頂いた。）

〈１日目・粉末粘土と水で遊ぶ〉

（2024年８月８日午前10時～12時30分）

・導入として，たぬきの「ポンタくん」というキャラクターのお話をした。「ポンタくん」はいつも粘土で遊んでいるという設定にして，粘土という素材への想像力を膨らませるようにした。その後の作業は，子どもたちが４人ずつテーブルを囲うように作業ができるよ

うにした。
「他の幼児の表現に触れられるよう配慮する」[4)]

１．粉末状の粘土を配る。
２．子どもたち自身で加水していき，泥状になったところで卓上のクリアファイル上に塗り広げていく。
※加水の量，方法は指定しない。（泥がファイル上に止まるよう多すぎる加水は止めた）
・粉末状の粘土に子どもたちそれぞれで加水することによって泥状に変化していく過程での子どもたちの言葉や様子を観察，記録する。
・卓上に素手で塗り広げていく中での言葉や様子を観察，記録する。

〈２日目・粘土の絵の具で遊ぶ。絵を描く〉
（2024 年８月９日午前 10 時～ 12 時 30 分）
導入として，たぬきの「ポンタくん」が粘土を絵の具がわりに開いているという話をして，素材の扱い方に前回とは違う意味を持たせるようにした。その後の作業は，子どもたちが長くつなげたテーブルを囲うように作業ができるようにした。
１．茶，緑，赤，黒の色をつけた泥状の粘土を用意し，最初は茶色の１色だけで筆を使って紙の上に描けるようにした。
２．少しずつ違う色を出していき，色の変化を楽しんだり，混色ができたりするようにしていった。
※描かれたものに対して質問をしたり，子どもたちの言葉に共感たりはするが，子どもたちの行為に影響するような言葉かけはしないようにした。描画方法も，筆の使い方も子どもたちの自由にした。
・泥状の粘土に色を加え，「描く」という目的に合わせて変化させた素材を使用する。間接的に筆を使って画用紙に表現されたものを子どもの言葉と共に観察，記録する。

実践の結果
〈１日目〉粉末状の粘土が粘着性のあるものから流動性のあるものに変化していくという素材の変化に伴って言葉の変化があった。
〈２日目〉４歳児の「描く」という行為自体に最終的な到達目標を設定しなかったことで，その時々の素材の様相によって表現が変化していった。行為と素材との対話による反復作業が紙の上に定着されていく様子がみられた。
素材については幼稚園教育要領解説に「その特性を知り，やがては，それを生かした使い方に気付いていく。このような素材に関わる多様な体験は，表現の幅を広げ，表現する意欲や想像力を育てる上で重要である。」[5)] とあるが，造形活動の中で均一化された素材の扱い方をする場合には気付きが起こりにくいと考える。そういった活動では，素材に対しても表現方法に関しても子どもたちは受動的である。「多様な体験」とはどういう活動の中で得られるものなのか，保育者は熟考するべきだと考える。

素材との対話
今回の研究では，導入を行なって使用する素材に意味を持たせるところからスタートしている。素材に対する興味や期待感を持たせる狙いがあったためである。

１日目の実践では，最初に，洗面器に粉状の粘土を入れて粉塵を吸い込まないように霧吹きで少し湿らせた状態で一人ずつに配った。その後は，少しずつ子どもたち自身で水を足していけるように穴を開けたキャップをつけたペットボトルに水を入れてテーブルごとに何本か用意した。
粘土が変化していく工程を子どもたちがゆっくり観察できるように，最初は指で粘土を触るようにして，徐々に手全体で粘土をこねるように説明をした。

加水を始めた時点での子どもたちの言葉
「べたべたになってくっつく」
「とれへん」
「なんか黒いのでてきた」
「ねばねばする」

水が加わることによって，粘土の色が黒い色に変色することに気付いたり，少しずつ塊になりつつある粘土を手で転がしたりしながら感触を楽しんでいる様子が見られた。この時点では指先に粘土の塊がついたものを見せてくれる子どもが何人かいたが，表情や言葉からは，不快な状態と捉えている子どもがいることがわかる。
最初の時間帯には無言でひたすら泥を塗り広げている子どもが見られた。言葉として外に発さなくても，泥の様相や触感を感じていたと思われる。
さらに水が加わると粘度は泥状に変化していき，なめらかな感触を楽しむ様子が見られるようになった。

泥状の粘土で遊んでいる時の子どもたちの言葉
「こんなどろどろなる？」
「どろどろどろんち」
「どろつきマンになる」
「にゅるっち」

今回はクリアファイル上に粘土が残っている状態で留めておきたかったので，ある程度の水分量になった時点でペットボトルを引き上げた。クリアファイルの上に泥状の粘土を塗りのばす時には「すべすべ」「気持ちいい」と言った言葉が聞かれるようになり，手の動きとそれに伴って出来る泥粘土の模様を楽しんでいる様子が見られるようになった。（図－１）

図－１

クリアファイルの上での遊びは時間の経過とともに，子どもたちの様々な気付きを誘発していき，クリアファルの上から離れていく遊びに発展していった。泥の塊を積み上げていく。泥を上から落とす。泥のついたまま手

を叩いて飛び散る様子を見る。自分の腕に塗る。泥のついた手を「掴んでみて！」と言って滑り抜ける感触を楽しんでみる。など，さまざまな遊びを楽しむ様子が見られるようになった。

加える水分量をある程度子どもたちの自由にしたため，泥状の粘土を触っているうちに，素材の特性に気づき自分の体の動きと素材との関係性を楽しんでいる様子が観察できた。テーブルを囲んでいたために，子どもたちは粘土の状態を視覚的に共有していたと考えられるが，それぞれの粘土の硬さは全員で統一しなかったために，素材から受け取った印象も様々であった。子どもたち全員が，事前に用意した同質の素材を使用して同じ感触を味わうのではなく，子どもたち自身の行為で変化していく素材に触れることで「素材との対話」が生まれるのだと考える。

また，素材へのアプローチの違いから，子どもたちが他者との違いに気づくことができる。また，自分自身が充実できること満足できることを追求することが心身や集中力などの発達にも影響があると考えられる。

２日目の実践の導入では泥絵の具の話をして，泥状の粘土に色をつけて絵の具として使った。描くための題材や目的などは一切告げずに紙の上にまず筆で塗ってみるところから始めた。

大胆に塗っていったり，少しずつ点々と慎重に筆を置いていったりする子どももいた。

最終的に形として残ったものの中には１色で塗りつぶされたものあったが，そこへ至るまでには，何度も紙全体に色を塗り広げて端から端まで筆で塗っていくことに没頭していた子どもの姿があった。（図－２）

図－２

最後に出来上がったものから子どもが何に興味関心を持っていたのかを読み解くことは難しい。むしろそれは活動中の様子や交わした言葉の内容にヒントがあるかもしれないし，子ども自身が言葉に表すことのできない何かを感じている場合もあるだろう，これらは継続した活動の中で保育者が気づいていかなければならない。造形遊びの過程で子どもたちがどのような気付きを得るのか，どのような心の変化があったのかに注意を向けるべきである。

一人の女児に対して「これは何かな？」と問いかけてみたが，首を傾げてしばらくして「白いとこにぬってる」と答えた。この時は何かの形を描くのではなく，余白を点描で埋めていくという行為自体を楽しんでいるようだった。紙の上に形として認識できるものがあったとしてもそれらは何かをイメージして描かれたものではなかった。目の前で自分の行為によって起こる色の変化や筆を動かした行為の痕跡が紙の上に残っていくことを純粋に楽しんでいたと考えられる。

今回は時間が許す限り子どもたちが自由に描き続けられるようにした。そのため，紙に穴が空いてしまったものや，全体が真っ黒に塗りつぶされたものもあった。紙の余白が残っている時点で「絵画としての作品」として中断して残すこともできただろう。しかし，その時々の素材が見せる変化や感触を子どもたちが楽しんでいる様子が見られたため，途中で手を止めるようにはしなかった。

２日間の実践からの考察

製作物の仕上がりのイメージをもとに造形活動をする場合，作品として仕上げるならば，終わるタイミングが子ども自身にも，指導者にも大まかな見当がつくが，造形遊びには見本がなく最終的に成果物を求めるものではないために，どこで終わりにするのかは難しい。流動性のある素材を活動の中心に置くことで，仕上がりという着地点のない活動をする場合は，子ども自身が飽きるまで続けるか，時間が来て終わるかである。

造形遊びは，最終的な目標に向かって進めていくものではない。何かの形になっていなくても，子どもたちのその時々の瞬間に沸き起こる感情や試し行動や衝動が素材と出会う事で生まれる行為の痕跡である。それらは子どもたちの過ごした時間であり，子どもたちそのものなのである。

過程における子どもたちの行為自体がすでに「表現」として成立しているということを認識することが必要である。

子どもの姿からの考察

（２）保育の中での表現活動における自己実現についての考察

①附属園での実践の事例４歳の女児

実践中の４歳女児との会話

思いのままに塗り広げて遊んでいるとき，「あのね」と不安そうに小声で話しかけてくる４歳女児。
「なに」と耳を傾けると，女児は真っ黒な画用紙の真ん中を指さす。
指の先を見ると穴があいている。
「ダメなことをしたからどうしよう」と筆者に問いかけてきた。
女児の耳元で「たくさん遊んだから，面白い穴ができたね。ほら，のぞけるよ。指が入るよ」と言葉をかけるとにっこりとした。

黙々と手を動かし，最後は黒で塗りつぶす行為が楽しくて力が入ったのだろう。

何重にも色が塗り重ねてある。画用紙全体を隅々まで注意深く塗り重ねていた女児。絵の具がはみ出さないように，また，塗り残しがないように黙々と手を動かしていた。手先の機能はかなり発達している子どもである。

黒の絵具を最後に与えられた時，最初は一部に試してみたはずだが，どこにどう使ったのかは知ることは出来ない。しかし，塗っていくどこかで完璧な黒一色の面を作るイメージが沸き上がり熱中したのだと推測できる。

（図－３）色の均一化を目指したことが紙の真ん中にあいてしまった穴の原因だ。目や手の神経をフル稼働させて塗ることに集中していた女児だが，穴が空いることに気づき失敗したとしょげている様子だった。しかし，面白い穴ができたと評価すると明るい顔に変わった。求めていたイメージ，目指したものとは少し違ったが，女児自身の心の中に熱中してやり切った充足感があったからこそ素直に筆者の言葉を受け入れたのである。

図－３

②京都市Ｓ保育園で造形指導の事例２歳の男児

クラスの子ども達に教材（葉・枝・木の実など）を用意して絵の具遊びを行う。子ども一人一人が思い思いの活動をする中，一人の男児が絵の具を触るのを嫌がり，手に絵の具がつくとスモックで拭っていた。

（図－４，５）

担任保育士に「この男児の普段の好きな遊びは」と尋ねると「車遊び」とのこと。

図－４

図－５

保育室から濡れてもよい車のおもちゃを数台持ってきてもらい，男児に渡すと，嬉しそうに車に色を塗り始める。（図－６）

図－６

その後は周りからスポンジを集めてきて連結し，枝で押して「ぶっぶー」とつぶやきながら遊び始めた。（図－７，８）

他児は給食の時間なので教室に戻ったが，男児は黙々と夢中になって遊んでいたので，園の担任保育士は「今日はとことん遊ばせてやりたい」と配慮した。遊び終わった男児は好きな車と絵の具の出会いをきっかけにして心が解放され満足した顔になっていた。

図－７

図－８

多少時間がかかっても可能性の芽が出てくるのを，保育者は我慢したり引いたり待ったりしなければならない。遊びきる，そこから生まれてくる達成感，満足感は自信と自己肯定感につながる。

これらの遊びは子ども自身が偶然発見したり，つくり出したりした遊びである。遊びの動機が友だちや年長児の姿に触発されることもあるが，今回はすべて子ども自身の「おもしろそう」「やりたい」というこの２つの思いが自発的活動としての遊びをスタートさせる動機になっている。遊びを持続させ，また新たな展開を生み出すエネルギーも自分のとりかかった活動そのものの中に存在していると言える。

まとめ

幼い子どもにとって未知のもの，新しいこととの出会いや経験は強烈なものである。それらが何であるかを確かめ自分の認知の引き出しに納めようとする。自然が与えた五感と Wonder の心を手段として，その認知方法の一つは「表現」することである。

幼稚園教育要領解説では，「実際の指導では，幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が到達すべき目標ではないことや，個別に取り出されて指導されるものではないことに十分留意する必要がある。」[6)] と記されている。表現のプロセスこそが彼らの充実の時間であり育ちのゆりかごなのである。子どもが日々の生活の場を含め遊び，未知のモノやコトを自分の中に取り込むことが出きるまで，つまり満足感，充足感を得るまで思い切りやりきる経験を提供できる環境を与える幼稚園，保育所，認定こども園の役割はとても大きい。そして，活動後「また，これやってや」「明日もきてくれる？」の言葉は，環境作りを頑張った大人（研究者，保育者）への最高のプレゼントであり，保育活動の成功のサインである。教材研究を保育実践に生かし，「子どもの表現活動を考えてみよう」をテーマに年齢も経験も異なる２人が研究をスタートさせたが，意見を交わし実践を共にし，こうして各々が論文にまとめみると，「表現のプロセスこそが子どもがエネルギーを注ぎこむ時であり充実の時間である。教材と向き合っておこなう子どもの行為そのものが表現（こどもによる芸術である）という結論を得たることができたと考える。保育士養成に携わる者として，保育者自身の体験不足や知識不足，保育時間や園の環境問題，素材や用具の使い方の難しさ，保育者自身の好みの偏りなど，悩みや課題はつきない。授業で育むべき力と保育現場の保育者が表現の知識･技能を高めるためには，保育士等キャリアアップ研修がその役割を果たすことになる。今後も養成校における教育の質の向上と授業の改善に向けて，保育現場との協働により様々な取り組みを行なっていきたい。

謝辞

本研究において，湊川短期大学附属幼稚園の原口富美子園長をはじめ幼稚園の先生方，京都市Ｓ保育園，ご協力いただきましたすべての方々に心よりお礼申し上げます。

引用文献

（１）厚生労働省（2018）保育所保育指針解説（平成 30 年３月），pp.275
（２）厚生労働省（2018）保育所保育指針解説（平成 30 年３月），pp.279
（３）厚生労働省（2018）保育所保育指針解説（平成 30 年３月），pp.279
（４）文部科学省（2017）幼稚園教育要領解説（平成 29 年３月），pp.246
（５）文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説（平成 30 年３月），pp.239
（６）文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説（平成 30 年３月），pp.52

参考文献

（１）津村真（1989）『子どもの世界をどうみるか』「行為とその意味」NHK ブックス
（２）Herbert Read（著）宮脇理･岩崎清･直江俊夫（訳）（2001）『芸術による教育』フィルムアート社
（３）津村真（1997）『保育者の地平』ミネルヴァ書房

幼児教育保育学科の学生による陶芸体験における一考察

―「丹波焼」の歴史と伝統文化にふれて―

A Study of the Ceramic Art Experience of Students in the Department of Early Childhood Education and Childcare

―From the History and Traditional Culture of Tamba Pottery―

安　井　良　尚

Yoshihisa YASUI

湊川短期大学　教授

abstract

Students who chose arts and crafts visited a ceramic facility near the university and were exposed to the history and traditional culture of Tamba pottery, including hands-on pottery making, while at the same time deepening their knowledge of clay as a material. Based on this pottery-making experience, it became clear that teachers need to create an environment for unique classes rooted in local culture and traditions.

キーワード：造形表現　図画工作　粘土あそび　陶芸　丹波焼

はじめに

令和６年度の湊川短期大学幼児教育保育学科２年生の選択科目である「図画工作」で陶芸体験を行った。

陶芸体験の導入として，１年次には「子どもと造形表現」の授業で粘土による造形遊びを行なっている。２年次で「図画工作」を選択した学生は本学近郊にある陶芸施設の見学も行い，陶芸体験で完成した作品は本学附属図書館に展示した。本研究では，造形遊びから丹波の焼き物の歴史や伝統文化に触れるという一連の流れの中で，学生の学びについて考察する。

背景

本学は丹波立杭焼の産地に程近い場所に位置している。

丹波焼は，日本六古窯の一つである。六古窯とは，日本で生まれた技術による作陶が行われており，中世から始まって現在も生産が続いている日本古来の瀬戸，越前，常滑，信楽，丹波，備前の六つの窯のことである。平成29年には日本遺産に認定されている。

丹波焼は，平安時代末から鎌倉時代初期に発祥したと言われており，山腹に溝を堀って天井をつけた「穴窯」での生産から始まり，慶長末期に朝鮮式半地上の「登り窯」や，「蹴ロクロ」が導入されるようになってからはさらに発展していった。一時期は衰退したが，昭和初期に河井寛次郎やバーナード・リーチに高い評価を受け，現在も多くの窯元が活発に活動を続けている。

湊川短期大学は，車で15分圏内に「兵庫陶芸美術館」「丹波伝統工芸公園・陶の郷」「三田陶芸の森。」といった施設があり，陶芸に関する地域の歴史や伝統文化を学ぶ環境が整っている。

実践

湊川短期大学では，以前は行われていた陶芸の体験授業や陶芸家による実演がコロナ禍以降行われておらず，令和６年の図画工作の授業で，本学近隣施設である「陶の郷」での陶芸教室に参加することにした。

前期の選択科目である図画工作には幼児教育保育学科の２年生48名中21名が登録をしており，この学生たちは，前年度１年次の「子どもと造形表現」の授業で粘土を使った「造形遊び」を体験している。

この「造形遊び」は，滋賀県の信楽から取り寄せた乾燥状態の粉末状の粘土に各自で加水していき，泥状になった粘土で自由に遊ぶというものであり，この授業で，粘土という素材への理解や子どもたちへの指導方法について学んでいる。この「子どもと造形表現」の前年度には，本学附属幼稚園において同じ素材と方法による幼児への研究保育を筆者らが行っており，「造形遊び」の導入としてその時の幼児たちの様子を伝え，また，小学校での「造形遊び」へ繋がっていく活動について意識できるように授業を行った。

この時も，幼児たちに行った時と同じように，加水の程度やどのように遊ぶのかなどは一切指示せず，目の前で素材が変化していく様子や素材の感触を味わうという内容にした。

粘土で何かの形を作る学生もいたが，粘土を手に塗ったり，机の上に敷いたビニールの上に塗り広げたりしながら，友人たちと自分が発見したことや感触について話をして素材の感触を楽しんでいる学生の様子を観察することができた。

その後，２年次に図画工作を選択した学生は，2024年５月29日に「三田陶芸の森。」へ見学に行っている。ここでは三田青磁について館長で陶芸家の伊藤瑞宝氏より，世界三大青磁の一つとも称される三田青磁について

の歴史や青磁の色彩について講義を受け，館内や陶芸教室の様子を見学した。（図-1）

三田青磁は青磁の原石が発見された江戸代後期から生産が始まったとされている。

本来は青磁の釉薬は透明であり，釉薬を掛ける素地の凸凹や光の当たり方で青い色の違いが出るという説明を学生たちは真剣な表情で聴いていた。本学の身近なところにあるこのような施設を訪れることや，授業では普段使わない素材の話などを聞くことで，表現するということの奥深さを感じられたはずである。

図-1

2024年7月26日「丹波伝統工芸公園　立杭　陶の郷」の陶芸教室には学生19名が参加した。

教室が始まるまでの間に，公園内にある「伝産会館」（丹波立杭焼伝統産業会館）で，鎌倉時代から江戸時代の「古丹波」と言われる古い時代の作品や現代作家の作品を鑑賞し，また，「伝習会館」（地域民芸品等保存伝習施設）では，伝統工芸士による作品を鑑賞した。

見学後の陶芸教室では，１人500グラムの粘土を使用し，「ひもづくり」という，粘土を親指の太さぐらいの紐状に細長く伸ばして底になる板状の粘土の上に積み重ねて縁を作っていく技法で成形した。（図-2）

本学の授業では，保育者として子どもたちに指導することなどを考えて素材や教材の研究をして製作をしている。しかし今回は，学生自身が使用するものを制作したため，陶芸体験への取り組み方に普段とは違う様子が見られた。授業で製作する物のほとんどは，身近な素材や廃材などで製作するため，作品の保存が優れているとは言えない。提出した後は返却も望まれないものも多い。しかし今回の陶芸作品は，破損しない限りは長期にわたって使用も鑑賞も可能であり実用的である。それだけに，学生は自分の満足いくまで作業を行なっていた。成形の過程において，学生が作業すると不均一な表面になってしまう。ろくろ台を使用してもなかなか思うような形にはならなかったようだ。何人かは，一度作り始めたものを崩して，最初から作り直すこともしていた。結局，参加した学生全員が１時間以上黙々と作業を続けていた。（図-3）

図-2

図-3

成形の終わったもの（図-4）は，教室の方から丹波焼の窯元へと送られ，素焼きをした後，釉薬をかけて本焼きをしてもらう。完成までに３ヶ月の期間がかかった。

図-4

完成した作品は，2024年12月20日より１月中旬まで湊川短期大学の附属図書館において展示した。（図-5）

実践からの考察

粘土という素材を中心にして，造形遊びから陶芸体験までさまざまに展開していく事ができた。

文部科学省のウェブサイトの小学校，中学校，高校の体験的活動の意義の中で「『間接体験』や『擬似体験』の機会が圧倒的に多くなった今，子どもたちの成長にとって負の影響を及ぼしていることが懸念されている。今後の教育において重視されなければならないのは，ヒ

図-5

ト・モノや実社会に実際に触れ，かかわり合う『直接体験』である。」[1] と記されている。

保育者が子どもたちに造形活動を行う場合，保育者自身が表現することの喜びや作品に対する愛着を経験しているべきであり，子どもたち以上に「直接体験」の機会を多く持ち，その中で体験的に学んだことを子どもたちに伝えていくことが重要だと考える。

今回の陶芸体験では，事前に粘土による造形遊びを行なっている。同じ粘土という素材を扱いながらも様々な表現方法があることを学生たち自身が体験的に学んだと言える。素材を直接手で成形していくことにより，思いもよらない形や素材の変容を体験することもできた。陶芸では，学生たち全員に同じものを製作するようにしたのではないので，それぞれの学生が感じたことや学んだことには違いがあるはずである。しかし，それらは学生自身が経験したことであり，教員から教えられたものやネットや教科書で学んだこととも違う。また，陶芸作品を鑑賞し地域の歴史や伝統文化に触れることや，陶芸家というプロの表現者に出会い話を聞くことで，学生たちが「表現する」ことについて再考する事ができたと言えるだろう。

辻泰秀は小学生に粘土を使って素焼きまでの仕上げを行なった陶芸の実践研究の中で，粘土を使った造形活動の有効性について述べている。また，活動以外の面では，「陶芸教材の実践研究をしていて感じたことは，焼成した参考作品等は残っているが，その教育実践の記録や報告が少ないことである。陶芸の盛んな地域の特定の学校や教員による実践が目立ち，図画工作・美術科の教師が学校に一人だけという場合も多いので，世代交替とともに優れた教育実践の方法や成果が消えてしまうことになりかねない」[2] と述べており，陶芸についての指導者や環境の問題点にも言及している。電気釜など陶芸の設備があっても専門的な知識がないと学生や子どもたちに指導することが難しいとはいえる。本学も，近隣に陶芸に関する施設があったからこそ今回の体験ができた。知識以外に設備や経験を必要とする活動は，指導する立場の者に実体験がなければ，授業に取り入れることは難しいだろう。

しかし本学のように，地域に学べる環境があるならば，養成校の資格取得の授業以外に，次世代に繋げ伝えていくべき歴史や伝統文化を学ぶ機会が授業の中にもっと増えてもいいはずである。地域に特化した，そこでしか学べないことが，その学校の特色として授業で行われてもいいはずである。そのためには，それらをしっかり記録し，伝えていく環境を指導者が作っていくことも必要だとえる。

専門的な知識のない分野であってもできることがあるはずである。今後も，地域の人材や施設などとの連携を模索しながら，歴史と伝統文化を意識した授業を考えていきたい。

引用文献

（1）文部科学省 Web サイト（2024 年 12 月 8 日参照）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055/003.htm
（2）辻泰秀（2016）　ものづくり教育の実践的研究Ⅲ－陶芸教育の教材－　岐阜大学教育学部研究報告　人文科学　第 65 巻　第 1 号

参考文献

（1）日本遺産ポータルサイト（参照 2024/12/8）
http://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/
（2）sirokuro）－日本六古窯公式 Web サイト（日本遺産）（参照 2025/1/6）　https://sixancientkilns.jp
（3）柳宗悦（2011）　民藝の旅　平凡社
（4）兵庫陶芸美術館（2017）　丹波焼と三田焼きの粋を集めて　兵庫陶芸美術館

子どもの歌におけるリズム表現

―付点８分音符と16分音符を中心に―

Expression of Rhythm in Children's Songs

―Focus on dotted eighth notes and sixteenth notes―

高　嶋　智　美

Tomomi TAKASHIMA

湊川短期大学　非常勤講師

要旨

本研究は，保育者養成課程において学生たちと子どもの歌の弾き歌いを行う際に起こるリズム変容と，その指導実践の試みである。保育の現場で良く用いられる曲の中から，『かたつむり』『おべんとう』，そして小学校の共通教材から『こいのぼり』を用いて，明治から昭和にかけての歴史的背景と音楽思想に触れながら，学生たちがそれらを演奏した時に，どのようにリズム変容が起きるのかを考察し，どのように指導すれば楽譜に準じたリズムで演奏できるのかについても検証した。

その結果，子どもの歌によく使われる付点８分音符と16分音符の組み合わせが持つスキップするように弾むリズムは，８分音符２つからなる等拍との区別が非常にあいまいで，常にどちらにも変容しうることが分かった。子どもの歌は日本人が持つ言葉のリズムとの関わりが大きいため，それぞれのリズムに合った言葉をあてはめることで，理解しやすくなる。しかしながら，リズム変容を無くし楽譜通りに演奏することと，日本語に基づいた子どもの自然な歌のリズムとは必ずしも一致しておらず，豊かな子どもの歌の表現のためにはそれを理解する広い視野が必要であるという結論に至った。

キーワード：ぴょんこリズム，子どもの歌，リズム変容，中山晋平

Keywords: pyonko-rhythm, children's songs, rhythmic transformation, Nakayama Shinpei

1．はじめに

コダーイ・メソッドとして現在でも受け継がれている優れた音楽教育メソッドを残したハンガリーの音楽教育学者コダーイ･ゾルタン（Kodály Zoltán　1882-1967）は，歌うことを音楽教育の根幹に据えていたことで知られている。コダーイは「こどもの音楽的活動の第一歩は，うたうこと」[1]であるとし，その著の中で，「うたうことは子どもの本能的な言語であり，小さければ小さいほどうたといっしょに動くことを要求する」[2]と述べている。さらに音楽教育は「すべての民族において，自民族の文化，民族の伝承から出発しなければならない」[3]とし，「言葉の抑揚と音楽が民謡（わらべうた，子守うたをも含む）においてもっとも完璧に一体をなしている」[4]として民謡やわらべ歌の重要性について説いた。

またオルフ楽器で知られるドイツの作曲家カール・オルフ（Carl Orff　1895-1982）も，自身の音楽において言葉を非常に重要視し，母国語による言葉と音楽の融合を説いた。彼は音楽について「基礎的な音楽は何かというと，それは決して音楽単独ではあり得ません。そこにはかならず動作がともなうものであり，踊りと言葉がついているもの」[5]だと述べている。オルフ研究所所長であったヘルマン・レーグナー（Herman Regner　1928-2008）によれば，オルフの教育理念では音楽教育は母国語と共に母国語によって始まり，音楽・踊り・言葉・そしてその他の芸術が一つの分野として認知されるもの[6]であった。

コダーイやオルフらのこのような考え方は，日本の音楽教育にも表れている。2017年に改訂され，2018年に施行された幼稚園教育要領において，領域「表現」は，「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにする」という観点から，それらを達成するべく８つの内容を示しているが，その中で，音楽については「音楽に親しみ，歌を歌ったり，簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」[7]ことが目指されている。

また保育所保育指針においては乳児保育に関わるねらい及び内容で，「歌やリズムに合わせて手足や体を動かして楽しんだりする」[8]，１歳以上３歳未満児の保育に関わるねらい及び内容で，「歌を歌ったり，簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする」[9]とも示されており，領域「表現」における歌の重要性が繰り返し述べられている。

更に，歌については領域「表現」以外の他領域でも，より具体的な記述がある。幼稚園教育指導要領及び保育所保育指針では領域「環境」において，「文化や伝統に親しむ際には，正月や節句など我が国の伝統的な行事，国歌，唱歌，わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり，異なる文化に触れる活動に親しんだりすること

を通じて，社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること」[10] とも示されており，歌は子どもたちが文化や伝統に親しむための重要な要素となっている。

加えて，領域「言葉」においても，その幼稚園教育要領解説の中で，「リズミカルな節回しの手遊びや童謡を歌うことは，体でリズムを感じながらいろいろな言葉を使って表現する楽しさにつながる」[11] という記述があり，歌を歌うことは言葉の豊かな発達にもつながる非常に重要な活動であることが分かる。これはまさにコダーイやオルフの提唱した音楽教育思想に重なるものであろう。

こうした観点から鑑みて，保育者養成校において，わらべ歌やそれに準ずる子どもの歌をとりあげていくことの重要性は非常に高いと言える。しかしながら，実際にはピアノの演奏技術の習得に大きな比重を取られ，歌に割ける時間は限られている。本論では，そうした現状を踏まえた上で，代表的な曲として生活の歌から『おべんとう』，季節の歌から『かたつむり』，そして小学校歌唱共通教材から『こいのぼり』を取り上げ，学生たちに実際に演奏してもらいながら，そこで起こりうるつまずきやその解決方法などを探るとともに，子どもの歌に取り組む際に必要とされるものは何かについて考察を行った。

2. 調査方法

今回は佛教大学の 2024 年度の器楽の授業内で，幼児教育と初等教育の免許取得を目指している学生８名に協力を依頼し，実際にその３曲をまず初見で片手演奏をしてもらった。全員ピアノ初心者ではなく，子どもの頃から年数にある程度のばらつきはあるもののバイエル後半からソナチネ程度の経験者である。全員がそれら３曲の歌を見聞きしたことはあるものの，楽譜を見たことはない状態で，まず旋律のみを演奏し，その後，弾き歌いを行った。

今回取り上げたこれら３曲には，いずれも付点８分音符と 16 分音符を組み合わせたリズムが使われている。これらの弾むようなリズムは「スキップのリズム」や「タッカのリズム」，「ぴょんこのリズム」など様々な呼ばれ方をするが，子どもの歌に非常によく使われるリズムである。これら３曲の成立年代から整理すると，『かたつむり』の初出は明治，年代は近いものの『こいのぼり』は大正，そして『おべんとう』は昭和と３つの時代に分かれており，当時のリズムの変遷を見る上で調査対象として適当であると考えた。

表１

かたつむり	文部省唱歌	1911年（明治44年）	『尋常小学唱歌』
こいのぼり	文部省唱歌	1913年（大正2年）	『尋常小学唱歌』
おべんとう	天野蝶作詞　一宮道子作曲	1949年（昭和22年）	『うたとゆうぎ』

これら３曲で使われている付点８分音符と 16 分音符の組み合わせ（以降，タッカのリズム）に関しては，すでに何度も言及されているところであるが [12]，今回は調査対象者を幼児やピアノ初心者ではなく，どちらかといえばピアノに苦手意識がない学生たちに絞ることで，演奏技術の不足からくるリズム変容でなく，日本独自の音楽文化としてのリズム変容が明らかになると考えた。そして，音楽と言葉の関係性をあきらかにするために，日本語の単語をタッカのリズムにあてはめて，それがリズムの理解にどのような影響を及ぼすかを探った。

3. 調査結果

これらの曲を演奏する際，起こりうるリズムにまつわる諸問題は，この付点８分音符と 16 分音符の組み合わせが３連符として演奏されることと，そのあとに出てくる８分音符が 16 分音符のように短くなってしまうこと，そして８分音符２つという等拍同士の組み合わせまでもタッカのリズムになってしまうことである。

タッカのリズムの連続，およびタッカと８分音符２つを組み合わせたリズムパターンを嶋田らはそれぞれ「ぴょんこリズム」，「ぴょんこ止めリズム」，８分音符２つのパターンを「等拍」[13] と呼んでいるが，ぴょんこ止めリズム，もしくは等拍のリズムが全てぴょんこリズムへと変容する現象は，『尋常小学唱歌』（1911）が出版された当初からすでにあったようだ。

このことについて嶋田は「かたつむり」と共に所載の「桃太郎」はすべて等拍で記譜されているにもかかわらず，当時からぴょんこリズムで歌われており，このようなリズム変容は唱歌が作成された時代だけに見られた現象ではなく，現代に生きる我々の中にも起こっている問題だと指摘している [14]。よって，今回は，このぴょんこリズムとそれに関連するぴょんこ止め，および等拍のリズムに着目した。

表２は，今回の調査に参加してくれた８名の学生たちがこれら３曲を初見で演奏した際に起こったリズム変容をポイント化して集計したものである。ポイントが高くなるほど，多くの変容が認められたことになる。参考として，彼らが調査当時に取り組んでいたピアノ練習曲も記載した。全員進度に多少の差はあるものの，子どもの頃にピアノを数年習ったことがあるが現在はやめている状態で，ピアノに触る事自体が久しぶりの学生も多かったため，調査日は大学の半期の授業の中でも，少しピアノに慣れた後半に行うこととした。

表２にあるように，３曲のうち「かたつむり」に関しては，誰もリズム変容を起こさなかった。これはぴょんこ止めリズムで書かれており，予想としてはぴょんこリズムの後の８分音符の等拍が，ぴょんこリズムに変容するのではないかと考えていたが，全員が初見の状態でも，正確なリズムでメロディを弾くことができた。

しかしながら，２曲目の「おべんとう」では予想以上に多くの変容が起こっている。最もリズム変容が多かったのは「こいのぼり」であったが，「おべんとう」と「こいのぼり」を比べると，「おべんとう」は 12 ポイント，「こいのぼり」は 14 ポイントと，ほぼ同程度のリズム変容が起きていることに着目したい。

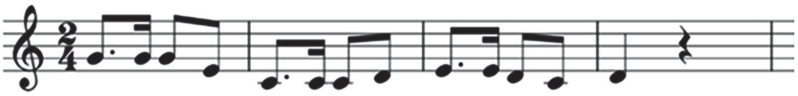
譜例１と譜例２は「かたつむり」と「おべんとう」の冒頭部分であるが，この２曲はどちらも全く同じ八五調の歌詞にぴょんこ止めリズムで書かれていることが分かる。しかし，同じぴょんこ止めリズムでありながら「かたつむり」にはリズム変容が起きず，「おべんとう」にのみ，譜例３に示したリズム変容が起きたのである。

表２

学生	取り組んでいる練習曲	かたつむり	おべんとう	こいのぼり	合計点
A	バイエル73番	0	2	3	5
B	バイエル90番	0	3	3	6
C	ソナチネ８-1	0	1	1	2
D	ソナチネ9-3	0	2	2	4
E	ソナチネ9-3	0	0	1	1
F	ソナチネ9-1	0	0	0	0
G	ソナタ（K.545）	0	3	3	6
H	ソナタ（Hob.XVI）	0	1	1	2
合計点		0	12	14	

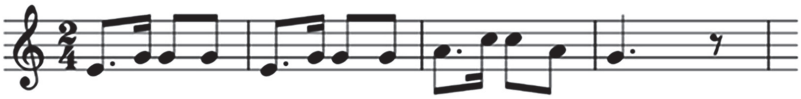
変容無し・・・・・・・・・・・・・・・・・0点
一部変容あり・・・・・・・・・・・・・・・1点
半数以上に変容あり・・・・・・・・・・・・2点
ほぼすべてに変容あり・・・・・・・・・・・3点

譜例１



で　ん　でん　　む　し　むし　　か　た　つむ　　り

譜例２



お　べん　と　　お　べん　と　う　れし　い　　な

譜例３

○は変容した箇所

この理由について，嶋田は日本語の歌詞に変容の要因があるのではないかと繰り返しのべている[15]。「おべんとう」を楽譜通りぴょんこ止めで歌うと，〈おべんと〉の〈ん〉の発音にアクセントがくる形になり日本語として不自然に感じられるため，より歌いやすさを求めて，ぴょんこリズムへ変容が起こるのではないか、とする考え方である。

このことと関連して，二宮は「音綴」という言葉を用い，発音の際に最も小さい単位として意識される音にはすべて同等の音の長さが与えられるという日本語の特徴から，〈ん〉などのハネル音も基本的には一音綴として数えるが，歌詞の場合は一音綴として数えたり数えなかったりすることを指摘している[16]。

〈ぴょんこ〉という言葉の元になったと言われる童謡「蛙の夜まわり」（1929 初出）をはじめ，多くの傑作と言われる童謡や流行歌を残した中山晋平（1887-1952）は，その中の一曲「あの町この町」では８分音符の等拍を用いて記譜している[17]が，この曲も現在ではぴょんこリズムに編曲されたものが出回っている。

雑誌『コドモノクニ』に 1924 年（大正 13 年）が初出と思われるこの曲は，当初♩＝ 80 という速度表示があるだけであった。その翌年である 1925 年（大正 14 年）の『金の星童謡曲譜第九輯』に収録された際には♩＝ 88 の速度指定に変わり，更にその翌年 1926 年（大正 15 年）『童謡小曲』第七集に収められた際にもそれは同様であったが，現在知られている楽譜には，〈はずみをつけて〉と書かれているものが多い。これはおそらく 1953 年（昭和 28 年）に発行された『中山晋平童謡名曲集』からきていると思われる。これは中山の死後に発行されたものだが，中山自身が生前出版を計画していたものであることから，作曲者自身がぴょんこリズムと等拍リズムの変容する関係性を認識し，理解していたと言えるだろう。

中山の未出版の『砂山』の自筆譜を発見し，藍川由美（1956-）は当初楽譜通り CD を録音し発表した際，その録音を聞いた中山の長女から「楽譜には書かれていませんが『砂山』はハヅムんですよ」[18]と指摘されたことを明かしつつ「たまにはタッカタッカという付点のリズムでも書きましたが西洋的なスキップのリズムをイメージしていたわけではありません。当時の日本人は八分音符の羅列で書かれた『あの町この町』などを自然にハズミをつけて歌ったので，晋平は楽譜に細かい指示をつける必要性を感じなかったようです」[19]と述べている。『あの町この町』がいつ頃からぴょんこリズムで日本中に広まっていったかははっきりとはしないものの，ぴょんこリズムを中山がのように認識していたかは 1938 年（昭

和13年）に発行された『中山晋平晋作童謡作曲集』の中山自身の序言からうかがい知ることができる。

「本曲集に収めたものの中には『ハヅミをつけて』として，四分の二拍子に書いてあるものが頗る多い。それは，多くは八分音符の羅列で，古来の日本民謡や，動揺がさうである様に，前の音符を，次の音符より，幾分長めに演唱したい必要から，人によっては，八分の六拍子に書くところを，讀譜を簡易にする爲めに，四分の二拍子に書いたものである。蓋し，此のリズムは，日本獨特のリズムで，これを八分の六に書いても，矢張り正確とは云ひ得ないからである。要するに，古来各地で行はれている，郷土童謡…手毬歌や，羽子つき唄のあのリズムを用ひたのが，作曲者の意図に他ならない。」[20]

この序言からぴょんこリズムはそれぞれの地域に子どもの童謡から生まれた日本独特のリズムであり，等拍やぴょんこ止めリズムをぴょんこリズムへ変容させることは言葉と音楽と動きを融合を具現化した形であったということが分かる。これは，先に触れたコダーイやオルフの音楽教育思想にも通ずるものであると言えよう。

この言葉と音楽の融合性については，実際に今回の調査に参加した学生からの感想にも表れている。Gさんは今回参加してくれた学生の中でももっともピアノ歴が長く，ソナチネアルバム１に関しては，ほぼ弾いたことがあり，今学期はまだ弾いていない曲の中からモーツァルトのソナタ K.545 を選んで練習している学生で，今回選んだ３曲も片手のみならず，弾き歌いで伴奏をつけ，容易に弾きこなした。しかし，楽譜通りであったかというと，むしろ対極で，「おべんとう」と「こいのぼり」の両方を，ほぼすべての等拍をぴょんこリズムに変容させていた。

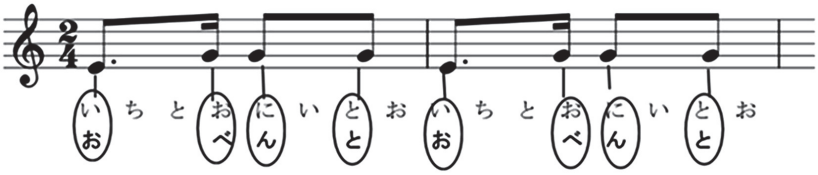
また，Gさんは同じぴょんこ止めリズムを持つ「かたつむり」と「おべんとう」のテンポをそれぞれ変えていたことに注目したい。楽譜には速度記号がなかったにもかかわらず，「かたつむり」は♩＝80程度の Andante でリズム変容のない形，「おべんとう」は♩＝120程度の Allegro で８分音符の等拍をすべてぴょんこリズムに変容させて演奏したのである。演奏後にそのことについて質問すると，学生自身はそのことに気付いていなかったが，「楽しく演奏することだけを心がけたらこうなった」という感想をくれた。そう考えると，Gさんの場合，リズムの変容は全参加者の中で一番多かったが，それは演奏技術の拙さからくるものではなく，むしろ歌詞から来る曲想の理解とその表現技術に優れていたからこそ起きた必然的な変容であったと考えられる。「かたつむり」はかたつむりのゆっくりとした動き，「おべんとう」はそれを心待ちにしている子どもの楽しげな姿というような日本語の歌詞が意味するものが曲全体のテンポと，リズム変容に影響を及ぼしているのだろう。

そのことはDさんも同様である。Dさんも「かたつむり」と「おべんとう」では多少テンポを変えていただけでなく，「おべんとう」と「こいのぼり」の後半部分の等拍は楽譜通りに演奏したが，前半部分はどちらも軽やかにぴょんこリズムで演奏している。

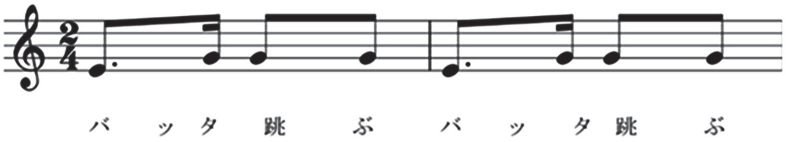
このことについてDさんは「途中でリズムが違うと気がついて，修正して演奏した」と述べているが，Cさんから H さんまでのソナチネ以上を練習中の学生も，楽譜の情報から，すぐにリズム変容に気付き，二回目には楽譜通りの演奏を行った。

しかしながら，バイエル練習中のAさんBさんは，ピアノなしで、歌や手拍子でリズムをとらえることにも苦戦した。Aさんはもとより，バイエルで直前に付点のリズムを使う88番や89番を練習していたBさんも，理論としては，譜例４のように，１拍を４分割して考える付点のリズムを「おべんとう」の歌詞にあてはめることはできたものの，拍を数えることに手一杯になり，最後まで止まらずに弾き終えることができなかった。

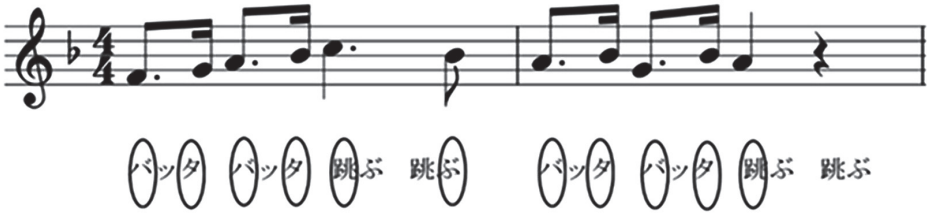
譜例４



譜例５



譜例６



そこで，今度は真ん中に〈ツ〉がつく言葉と，それに関連した意味を持つ２音綴の言葉も同時に考えさせた。

Ａさんは「バッタ」が「跳ぶ」と即座に答えたため，全員で譜例５のようにそれを唱えながら手拍子をしてみた。すると，先ほどまでの硬さが嘘のようにスムーズに手拍子でリズムを合わせることができた。

それを，すぐに「こいのぼり」にもあてはめてやってみると，難しいと予想された３拍目と４拍目の等拍の変形したリズムの部分も，譜例６に示したように〈跳ぶ跳ぶ〉の言葉に合わせすぐに取ることができた。あまりにも簡単にリズムがとれたことに，学生自身も驚くほどの変化だった。

厳密にいえば，〈バッタ〉は音綴としては三音綴で三連符のリズムになるが，このことについても「もうちょっとだけ鋭いバッタにしよう」というような声かけだけで解決した。

これらのことからも，やはり日本語には日本語に特有の音感覚が根底としてあるということが分かる。これは日本語がモーラ言語であることに由来するのかもしれない。俳句や短歌などはまさしくその代表例だろう。音と言葉が深く密接につながっているからこそ，親しみやすい言葉をあてはめることで，西洋音楽理論の中にある拍子や拍も理解しやすくなったのではないだろうか。

4. まとめ

最後に，中山より40年ほど後に生まれた，わらべうたの研究でも知られる小泉文夫（1927-1983）の言葉を借りて，今回の学生たちの演奏を振り返ってみたい。小泉はその著『わらべうたの研究』の中で子どもの自発的創造性と，その子どもたちに与えられる外部からの音楽教育の内容には大きな隔たりがあり，どこまで行っても借りものの音楽文化でしかないと述べている[21]が，これは先に引用した中山の序言[22]とも同義だと言えるだろう。子どもの歌に現れるぴょんこリズムは，西洋音楽でいうところの〈付点８分音符と16分音符〉の組み合わせと完全に同じではないのである。そして，このことは今回の学生たちの演奏にもよく表れていたと言える。学生たちの中で，最も曲の雰囲気に合った演奏をしたのは，リズム変容ポイントも最も高い学生だった。これは非常に重要な視点であると考える。子どもの歌にあらわれるリズムは，西洋音楽上の楽譜だけで完全に表すことはできず，その変容も日本語の歌詞の持つ内容やそこから想像されるテンポ等によって多様な形であらわれる。このことは，子どもの歌を演奏する際に，必ず心にとめておかねばならない。

西洋音楽的枠組みの中でとらえた時の正しいリズムと，日本語から生まれた自然なリズムとは似て非なるものであることを理解し，子どもたちの自由な発想から生まれる音楽やそのリズムを共有する広い理解を持つことが，保育に関わる人間には必要とされているのだと考える。

引用・参考文献

1　フォライ・カタリン / セーニ・エルジェーベト共著（1974）『コダーイ・システムとは何か』，全音楽譜出版社，p.6
2　中川弘一郎編訳（1980）『コダーイ・ゾルターンの教育思想と実践』，啓文堂，p.158
3　フォライ・カタリン / セーニ・エルジェーベト共著（1974），p.3
4　前掲書，p.3
5　柴田礼子（1990）「オルフ研究所　レーグナー教授にきく」『季刊音楽教育研究』第33巻第２号，p.160
6　前掲書，pp.160-166
7　『平成29年告示　幼稚園教育要領　保育所保育指針　幼保連携型認定こども園教育・保育要領』チャイルド社，p.21
8　前掲書，p.36
9　前掲書，p.41
10　前掲書，p.19，p.47
11　前掲書，p.229
12　小川容子 / 嶋田由美共著（2016）『「ぴょんこ」リズムの記憶と変容』『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第161号
13　嶋田由美（2009）「明治後半期『唱歌調』とは何か―その構造的特殊性と生成に至る教育的背景」『音楽教育学』第39巻第１号
14　嶋田由美・小川容子・水戸博道著（2010）「『唱え』から『ぴょんこ節』・『ぴょんこ止め』へ―日本人のリズム感覚に関する歴史的･認知的思索―」『音楽教育学』第40巻第２号
15　小川・嶋田（2016）など
16　二宮紀子（2017「『日本の子どもの歌』における言葉のリズムと音楽上のリズム」『東京福祉大学・大学院紀要』』第７巻第２号，p.92
17　池田小百合「なっとく童謡・唱歌」https://www.ne.jp/asahi/sayuri/home/doyobook/doyostudy09.htm（2024.12.10）
18　藍川由美（2006）CD「『日本のうた』歌唱法」解説，カメラータ・トウキョウ，p.43
19　同上
20　池田，前掲
21　小泉文夫（1969）『わらべうたの研究―研究編』稲葉印刷所，p.248
22　池田，前掲

湊川短期大学紀要　投稿規程

第１条（目的）

湊川短期大学紀要(Bulletin of Minatogawa college　以下「本誌」という）は本学教員が研究活動の成果を内外に発表し，研究成果の共有や一層の研究活動の発展を目指すことを目的とし，年一回以上発行する。

第２条（投稿者の資格）

投稿者（本誌に投稿出来る者）は，原則として本学教員（非常勤教員も含む)に限る。ただし,湊川短期大学紀要編集委員会(以下「編集委員会」という)が特に認めた場合はこの限りではない。

第３条（執筆代表者）

本誌に投稿した原稿において一番目に氏名を記載している執筆者を執筆代表者とする。執筆代表者は，本誌の同一号において，一つの原稿に限り執筆代表者となることが出来る。

第４条（原稿の種類）

原稿の種類は，「原著論文」,「作品」，調査・実験・観察結果等を報告する「研究報告」,「総説」,「学会報告」,最新情報の「論評」や「書評」等とし，未発表のものに限る（ただし，「学会報告」についてはこの限りではない)。また完成原稿を提出することとする。

第５条（原稿掲載の可否）

原稿掲載の可否は編集委員会で決定する。また編集委員会の判断により，リライト，縮小等を求めることが出来る。

第６条（投稿の方法及び締め切り）

原稿の投稿に際しては,事前に申し込みを行い,別に定める「湊川短期大学紀要執筆要項」に従い，原稿の種類を明記した上で，定められた期日までに編集委員会に提出しなければならない。

第７条（校正）

校正は，投稿者の責任において行い，初校のみとする。校正段階での内容の変更は認められない。校正は投稿者に初校を返却した日から定められた期日までに校了し，編集委員会に提出するものとする。校正は誤字・脱字などの訂正を原則とするが，編集委員会が特別に認めた場合はこの限りでない。

第８条（経費の負担）

投稿料は無料とする。ただし，カラー印刷や編集委員会の許可による大幅な訂正等で，増ページが生じた場合などは，投稿者の負担とする。

第９条（別刷）

別刷は30部を無料で，投稿者に配付する。ただし30部を超えて希望する場合は，投稿者の負担とする。

第10条（編集委員会）

編集委員会は，図書委員会の委員で構成し，必要に応じて別に委員を委嘱できるものとする。

第11条（著作権）

本誌への掲載論文等の著作権はそれぞれの著作者に属するが，各著作者は湊川短期大学に対して，当該論文等の出版権・複製権・公衆送信権等の利用につき，本誌の電子化・公開に必要な限度でその権利を湊川短期大学が行使することを許諾するものとする。

第12条（その他）

この規程に定めた以外の事柄については，編集委員会の判断によることとする。

附則　この規程は，平成21年７月30日より施行する。なお旧規程は施行日より廃止とする。

湊川短期大学紀要　執筆要項

１．原稿の記述は，表題（和文および英文)，執筆者名（和名およびローマ字)，所属（大学名及び専任・非常勤の別，幼稚園・保育所名など)，和文要旨（300字以上400字以内)，もしくは英文要旨（200語以上300語以内，和文要旨も記載すること)，キーワード５語以内（和文，もしくは英文（英文の場合は和文キーワードも記載すること)）を添付し，本文および注，文献，表・図，資料の順序に記載する。

２．章，節などの見出し区分は，ポイントシステムを用い，次の順とする。

１.（大見出し),1.1（中見出し),1.1.1（小見出し），１）片括弧，（１）（両括弧）

３．本文は，書き出し及び改行後の書き出し部分を１マス空け，句点は「。」とし，読点は「,」（コンマ）とする。

４．注には通し番号をつけ，本文中の該当箇所の右肩に注１)，注２）のように通し番号をつけ，本文と論文末の文献表との間に一括して番号順に記載する。注記の見出し語は「注」とする。

５．文献は,下記の様式により,論文末尾に著者名のアルファベット順に一括して記載する。なお，欧文（ローマ字）誌・書名は，イタリックとする。また，著者が複数の場合は，その全員を記載する。その際，著者名と著者名の間は，中ポツ[・]でつなぐ。

a. 雑誌論文の場合

著者名（発行年)「論文表題」『掲載雑誌名』巻（号),ページ数.

※欧文雑誌の場合

著者名.（発行年）論文表題,掲載雑誌名,巻（号）,ページ数.

【記載例】

鈴木一郎（2000)「総合学習における教育実践学的存在論」『総合学習』4,　pp. 38-39.

James. M.（2004）Japanese Education, *Journal of Education*, Vol.16, pp. 58-59.

b. 著書の場合

①著者名（発行年）『書名』出版社・発行所名，発行年，ページ数.

②著者名（発行年)「論文表題」編者名編『書名』出版社・発行所名，ページ数.

※欧文著書の場合

著者名.（発行年）論文表題.In 編者名(ed),書名,出版杜・発行所名,ページ数.

【記載例】

鈴木一郎（1998)『図で読むスクールカウンセリング』ミノルタ書房，pp. 33-45.

Chales.A.,.Singlehood. In Macklin.E. Rubin.S（ed）,（1987）*Families in postmodern society*. Oxford University Press, pp. 34-35.

６．図・表は原稿本文と別紙を用いて作成する。そのまま写真製版して印刷できるようにする。ただし，特殊な印刷については（例えばカラー印刷等)，その実費を投稿者が負担する。原稿本文に，およその挿入位置等を指定する。

７．表のタイトルは表の上に,図のタイトルは図の下に書くこと。また図と写真は区別せず，図として一連の番号を付けること。

８．原稿はA4判タテ用紙でワープロソフト（Microsoft Office Word）を使用し，40字×40行で作成すること。原稿枚数は図表および注を含めて，16枚以内とする。

９．原稿は，原則としてワードファイルで電子メールに添付して提出すること。併せて，プリントアウトしたものを１部提出すること。

10．校正は赤字で初稿に直接記入すること。大幅な修正が必要な場合は必ず紀要編集委員に承諾を得ること。

2017.6.7　図書委員会決定

編集委員会
委員長　静　　和　美
委　員　溝　上　　彩

湊川短期大学紀要　第61集

令和７年３月１日　発行

発行人　浅井　祐子

発行所　湊　川　短　期　大　学
〒669-1342　兵庫県三田市四ツ辻 1430
電話（079）568-1858㈹
FAX（079）568-1568

印刷所　交友印刷株式会社
〒650-0047　兵庫県神戸市中央区港島南町５丁目４－５
電話（078）303-0088
FAX（078）303-1320